

愛知県東海市

知多弥勒寺遺跡発掘調査報告

1998

愛知県東海市教育委員会

愛知県東海市・知多弥勒寺遺跡発掘調査報告 正誤表

誤 21ページ 24行目～25行目

「二（九かもしれない）十人ニテ候（ないしは作）」

正 「二（九かもしれない）十八人ニテ候（ないしは作）」

[*20人を28人に]

愛知県東海市

ちたみろくじ
知多弥勒寺遺跡発掘調査報告

1998

愛知県東海市教育委員会



1 II区遺構検出状態（北西から南東を望む）



2 II区ピット1 刺しの銭貨埋納状態



3 IV区S X I 遺構検出状態（西から東を望む）



4 「天文15年」銘硯

序

愛知県東海市は、知多半島つけ根の西北岸に位置し、伊勢湾に面しています。市域の北部は、古代あゆち湯の一角を占め、集落跡・古墳など数多くの古代遺跡が分布し、要衝の地であったことを示しています。このように遺跡分布が密なことから古代史関係については、それなりのようすを伺い知ることができるのですが、中世期については、丘陵部での窯業生産遺跡以外は、割合稀薄なところがありました。

このたび、弥勒寺遺跡の発掘調査によって、寺院関係遺跡ではありますか、戦国時代のようすの一端を知ることができました。

弥勒寺は、東海市と南接する知多市にかけて広がっている半島域の中でも、最も広い面積を持つ海岸平地の北寄りにある一つの独立した台地に建立されています。弘法寺として有名で、古くからたくさんの参詣者があります。遠方からこの寺に至る交通機関としては、名鉄電車の太田川駅が最寄りの駅になるのですが、ここ駅舎は寺院風の建物で、それは、弥勒寺にちなんでいるともいわれています。

発掘調査した場所は、現在の寺院の北東に接し、丘陵上の段々畑になっていたところですが、寺伝では、古くこの辺りに寺坊があったとのことです。現在の状態からは、遺物自体も散布しておらず、そうしたことを見ても全く伺い知ることはできませんでした。発掘調査によって、寺坊の存在が強くなり、さらにそれが火災にあって衰微したことにも明らかになりました。また、「天文十五年」(西暦1546年)の紀年銘を持つ硯が出土し、貴重な資料となりました。ここに、報告書としてまとめ刊行いたします。

終りとなってしまいましたが、発掘調査にあたりましてご指導ご協力をいただきました関係諸機関並びに関係者の方々に、深く感謝を申し上げます。

平成10年3月

東海市教育委員会
教育長 伊藤克己

目 次

第1章 調査の経緯と周辺の遺跡	
第1節 調査の経緯.....	1
第2節 調査日誌（抄）.....	2
第3節 弥勒寺と周辺の遺跡.....	3
第2章 調査の成果・検出した遺構	
第1節 基本層序.....	5
第2節 弥生時代の遺構.....	6
第3節 古墳時代の遺構.....	6
第4節 中世の遺構.....	8
第3章 調査の成果・発掘した遺物	
第1節 弥生時代より南北朝時代までの遺物.....	15
第2節 室町（戦国）時代の遺物.....	17
第4章 調査のまとめ.....	25
出土遺物計測表.....	27
図 版（実測図・写真）.....	31

例 言

- 報告書の作成に当たり、瀬戸美濃窯産陶器の編年については、井上喜久男氏（愛知県陶磁資料館主任学芸員）、常滑窯産陶器の編年については、中野晴久氏（常滑市民俗資料館学芸員）、石材の鑑定（肉眼観察による）については、堀木真美子・鬼頭剛氏（財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査研究員）のご教示を得た。
- 調査に当たって、次の各機関等のご指導ご協力を得た。（敬称略・順不同）
愛知県教育委員会文化財課・財団法人愛知県埋蔵文化財センター・株式会社大京名古屋支店・大成プレハブ株式会社中部支店・前田造園土木株式会社・東海市シルバー人材センター・弥勒寺
- 遺物の整理、製図等には、立松彰・永井伸明（東海市教育委員会社会教育課）、成田英里・下條紀子（遺物整理臨時職員）があたり、愛知製鋼株式会社技術学園生文化財研究部（顧問・亀蒿伸也、メンバー・三橋達彦・成重博司・大塚寿昌・竹下弘倫・佐藤寛之）のご協力を得た。
- 出土遺物及び調査記録は、東海市立郷土資料館において保管している。

第1章 調査の経緯と周辺の遺跡

第1節 調査の経緯

調査に至る経緯 弥勒寺の建立されている台地の一角を掘削造成してマンションを建設する計画が持ち上がり、これに関して弥勒寺より、建設予定区域には寺伝によれば寺坊があったとされるところであり、調査等について留意してほしい旨の申出が、平成7年（1995年）に東海市教育委員会の文化財保護担当である社会教育課に対してあった。当該地域は、遺物の散布も認められず周知の遺跡ではなかった。

平成8年2月になって、開発事業者から当該開発区域における、埋蔵文化財所在の有無確認の照会があり、これを受けて愛知県教育委員会文化財課の指導のもとに東海市教育委員会において、8カ所（1カ所2m×2m）の試掘調査を実施した。その結果、天目茶碗や内耳鉢などの遺物及び柱穴様の遺構がみつかり、中世期の未知の遺跡が所在することを確認し、「弥勒寺遺跡」とした。

遺跡の存在が明らかになったことにより、愛知県教育委員会文化財課から、開発工事に当たっては事前に発掘調査が必要であるとの指示があった。その取扱いについての協議を、開発事業者と東海市教育委員会社会教育課で行い、調査経費を開発事業者が負担して、東海市教育委員会が発掘調査を実施することになった。

調査区域 台地開発区域の急斜面を除く緩斜面の全域約3,000m²について、発掘調査を実施した。調査は、西側の台地頂部寄りから東側に向かって着手した。現地は、段々畑様に4段の平坦面があり、打ち捨てられた柿畠、木瓜畠のほかは荒蕪地となっている。これら樹木及び生い茂った雑草・蔓類をバックホウによって除去し、あわせて、耕作土の掘削も行い、平成8年11月25日から発掘調査に着手した。晩秋から冬季にかけての風当たりの強い台地上での調査となつたが、翌年の2月12日に無事計画どおり現地調査を終えることができた。そして、平成9年度に、報告書のまとめに入った。

調査員等 調査関係者は次のとおりである。

調査主体者／東海市教育委員会（教育長伊藤克己・教育次長原田寛了）、事務局／社会教育課（課長鈴木淳雄・同補佐片山武史・同補佐立松彰・文化係長黒江隆夫・近藤直樹・小島久和・田嶋美生）、調査員／社会教育課立松彰、調査作業員／東海市シルバーハウスセンター構成員。

このほか、発掘作業及び遺構の実測について、前田造園土木株式会社の沖崎淑人・山本浩明らに携わっていただいた。

この報告は、発掘調査を担当した立松彰が、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、蟹江吉弘（愛知県立半田高等学校）、鈴木正貴（愛知県埋蔵文化財センター）、永井伸明（社会教育課）らの所見を受けつつとりまとめた。

第2節 調査日誌（抄）

- 平成8年（1996）11月11日～22日 発掘調査地の草刈り、表土層（耕作土）の除去作業と調査準備。
- 11月25日 調査開始。I区南側西端から着手。S X 1を検出。
- 11月26日 I区南側中ほどで、SD 1・2を検出。SD 2より羽付鍋・内耳鉢などの遺物が出土。焼土ブロックの埋まるビット（SX 2）を検出。
- 11月28日 I区南側より一段下がった北側の調査。細い溝SD 3・4を検出。SD 3より、近世の瓦片が出土。
- 11月29日 前日に引き続きI区北側のSD 4の北東方向を調査。
- 11月30日 I区北側の調査続行。遺物はほとんどなく、遺構も無い。I区南側の調査に戻る。SX 5の埋土は炭化物を主とする層で、内耳鉢・土師皿・天目茶碗片などが混在する。この炭化物には、茎のような節のある太い植物が認められる。
- 12月3日 I区北側を調査。樹木穴群の北側の少し下がったところから土師器（ないし弥生土器）竪片が出土。この跡跡は、中世期のものとらえていたが、さらに古い時期の遺物も存在する。
- 12月4日 II区（西から2段目）の北側区調査。遺物は稚薄である。北東溝で溝（SD 7）を検出。
- 12月6日 II区の南側区調査開始。弥勒寺の現住職によれば、山門の真北にある、この区域には、古い時期に寺があった（寺伝=口伝）とのことである。SD 7は、南東寄りに深くなる。覆上に遺物は混入しない。
- 12月7日 既調査区のI区・II区北半の写真撮影。II区の南側区調査。I区との境の一段下がる面に遺物が集中している。I区面から投げ込まれたような状態を示す。遺物は、羽釜などのはく直径6cmほどの非遗クロク調整の手づくの土師器皿が割合まとめて出土する。このほか陶器（瀬戸美濃窯とみられる）も出土する。
- 12月9日 II区の南側区調査。SD 8を検出。
- II区の南側区の北端部の平坦面の10m²ほどの範囲から宋鏡が9枚出土。
- 12月10日 II区の南側区で、耕作土の黒褐色土を取り除いた粘土面から方形のビット群を検出。
- 12月11日 II区南側区の南端の調査。
- 12月12日 SD 8区域内からは、相変わらず遺物が数多く出土する。遺物の出土状態は、溝の中そのものよりも、I区からII区に向けて下がる法面に多く、炭化物の混入する土層も認められる。遺物は、羽付鍋・内耳鉢・土師器皿・天目茶碗などの陶器がある。
- 12月13日～16日 II区南側区の調査継続。
- 12月17日 I区南端の平面図実測にあたり、掘り残しの部分があることが判明。SX 1・SX 5の精査。炭化物層が分布する。この層の中に、赤く焼けた土の塊（灰土のよう）が混入している。
- 12月19日 SD 8がI区側に大部食い込んでいることが判明。I区の肩から掘り直す。
- 12月20日 II区南側区SD 8の調査継続。埋土内から、石製の硯、青銅製の金属器片が出土。
- 12月21日 II区南側区のほぼ中央に位置する方形のビット（P 1）から、藁（純）でつながったさじ状の銅貨90枚ほどが出土。
- 12月24～26日 II区南側区の調査継続。
- 12月27日 II区南側区の清掃と遺構等の写真撮影。
- 平成9年（1997）1月6日 II区南側区の実測。作業道を確保するためIII区を残し、IV区を南側から調査開始。遺構確認の地山面に埋め込まれた形で大きな丸い石を数個検出。
- 1月7日 IV区南区の丸石を検出したところの南側で僅かに色調の異なる部分が3カ所（東からSK 1～3とする）認められ、それを掘り下げてみると、SK 1から宋鏡が1枚出土。SK 2から、さらに大きな石が出土し、落ち込みのことが分かる。
- 1月8日～10日 IV区南側の調査。IVSK 2から、五輪塔の笠と挽臼が出土。寺院関係の遺跡である可能性がさらに強くなる。ほかに、古墳時代の須恵器の蓋杯・高杯が並んで出土し、さらにもう一つの古墳時代の須恵器が存在する。中世期の掘り込みによって、その遺構は特定できず。IVSK 1～3はつながってしまい。IVSK 1とする。土師器の高杯も出土。
- 1月13・14日 IV区南側の調査。粘土質の地山が乾燥して大変硬くなり難波する。IV区東側の肩に溝状の落ち込み（SX 2）を検出。内耳鉢などの遺物がまとまって出土する。
- 1月16日 IVSK 1の写真撮影と土層実測。
- 1月17日 IV区中央付近の調査。中世遺物の出土量は少ないので、須恵器が混じる。
- 1月18日 IVSK 1の実測と遺物の取り上げ。
- 1月20日 IV区中央付近の調査。挽臼の入った小穴を検出。SK 2からは内耳鉢・羽付鍋・土師皿が数多く出土する。
- 1月21日 IVSK 2は、溝ではなく、IV区より一段下がって面を作り出すことが判明。I・II区境の肩面同様に、IV区の肩面に投げ込まれたように遺物が集中する。
- 1月23・24日 IVSK 2から常滑赤焼きの円筒井戸枠を検出。新しい時期のもので1個体のみが埋けられており、井戸ではなく、水槽として利用されていたものとみられる。
- 1月27日～29日 IV区北側とSX 2の調査。北部も中央部と同様、遺物の出土はほとんどない。土坑・溝を検出したが比較的新しい時期のが多い。
- 1月30・31日 III区北側の調査開始。大溝（SD 2）と条痕を施す蓋形土器の埋まった小穴を検出。弥生時代の遺構も存在することが判明。
- 2月3日～5日 III区北側の調査継続。
- 2月6日～8日 III区南側の調査。方形の土坑を数カ所検出。IV区の中央部の遺構同様、新しい時期のものとみられる。
- 2月10日～12日 写真撮影、実測。調査終了。

第3節 弥勒寺と周辺の遺跡

位置と地形 弥勒寺遺跡は、知多半島の中では広い面積を持つ伊勢湾に面する海岸平地北部の独立した海拔26mほどの台地上に位置する。推定される旧海岸線からは、600mほど入り込んでいる。そのすぐ北東には東海市役所があり、南方には大田川をはさんで大田町の市街地が広がっている。西方の伊勢湾岸部は、近世期に新田が埋築され、さらにその地先に、名古屋南部臨海工業地帯の一角を占める製鉄所が立地している。この海岸部は、古くは、万葉集に「知多の浦」や「可家の湊」として詠まれたところもある。

周辺の地形をみると、北部から東部にかけて知多半島の骨格をなす海拔50m前後の丘陵が伸びている。知多半島の丘陵は、海拔130mから40mまでの高度をもち、谷によって分けられ、北部の尾張丘陵から南へ向かって、大府丘陵、知多丘陵と呼ばれている。東海市の大部分は大府丘陵と知多丘陵が占めている。弥勒寺眼下の南方には知多市まで続く半島域のなかでは最も広い海岸平地が広がっている。

弥勒寺の由来 弥勒寺は、天平勝宝元年（西暦749年）行基開基伝説を持つ。往時は、一山六カ寺堂伽藍の知多郡屈指的一大寺であったという。その後、戦国時代に兵火に遭い、本尊弥勒菩薩と仁王像を残して、全部焼失してしまったという。今回の調査でも明らかになったように、焼失したことがあったのは事実のようである。その後、尾張第2代藩主徳川光友の寄進によって、元禄年間（1668～1704）に再建復興されたという。弥勒寺の木村達章住職によれば、今回の発掘調査地点に古い時期の寺坊が存在したとの伝えがあるとのことである。

周辺の遺跡 弥勒寺のある台地の南方には、海岸平地が広がっており、この平地には、海岸線に平行して、幾条もの砂堆列（微高地）が伸びている。この砂堆列は位置関係から三つに区分され、内陸寄りから第1砂堆、第2砂堆、第3砂堆と呼ばれている。この砂堆上には弥生時代以降の遺跡が点在している。最も海岸寄りの第3砂堆には、松崎遺跡を始めとする古代土器製塙遺跡が連なっている。

弥勒寺の台地下に広がる第2砂堆上には、近世期の大里村から引き続く集落が形成されており、その遺跡についての詳細は不明である。分布調査や試掘調査によれば、弥生時代中・後期から古墳時代の前期にかけての遺跡が点在し、鎌倉時代（の13世紀代）の遺跡が広い範囲で広がっているようである。弥勒寺遺跡の主体時期をなす戦国期については、稀薄である。ただ、同砂堆には大永6年（1526年）開基と伝える龍雲院や、明応2年（1493年）開基と伝える常蓮寺が所在しており、戦国時代の集落跡も存在する可能性は高いところである。

*東海市史編さん委員会編 1990 『東海市史』通史編

石川松斎（1929『横須賀町誌』）によれば、「候峨天皇の弘仁5年（紀元1415）宗祖弘 法大師当郡御巡化の御り有縁の衆生の為、一宇を建立されたのが此の寺の起因である」とある。（弘仁5年＝西暦815年）。

**石川松斎（1929『横須賀町誌』）によれば、「織田信長の兵火に罹り頽廃したが、天文11年（紀元2202）跡昌上人大に努力復興された」とある。（天文11年＝1542年）。



図1 弥勒寺遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地等分布図（縮尺1/25,000）

表1 弥勒寺遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地等一覧表（図1の番号等に対応する）

番号等	遺跡名	種別	時代	番号等	遺跡名	種別	時代
36	浜新田堤防	堤防	江戸	60	北広遺跡	散布地	中世
史11-37	松崎遺跡	製塙跡	古墳~平安	61	御亭遺跡	散布地	古墳
史19	丸根古墳	古墳	古墳	62	鳥帽子遺跡	散布地	歌・魏~
40	水深遺跡	散布地	中世	63	宮西遺跡	製塙跡	奈良~
41	後浜新田堤防	堤防	江戸	64	大門遺跡	製塙跡	奈良~平安
42	下浜田遺跡	製塙跡	奈良~	65	玉林寺遺跡	散布地	奈良~中世
43	後田遺跡	散布地	古墳	66	東屋敷遺跡	散布地	中世
44	神宮前遺跡	散布地	古墳	67	養父新田堤防	堤防	江戸
45	王塚古墳	古墳	古墳	68	浜脇遺跡	製塙跡	奈良~
46	峰旭貝塚	貝塚	中世	69	祇園御堂古墳	古墳	古墳
47	北屋敷遺跡	散布地	古墳?	122	郷中遺跡	散布地	中世
50	煙問遺跡	散布地	古墳~中世	123	弥勒寺遺跡	寺院跡?	姓耕
51	龍雲院遺跡	散布地	奈良~				
52	東烟遺跡	散布地	平安~中世				
53	高ノ御前遺跡	散布地	魏~歌				
54	太田川第3号踏切貝塚	散布地	古墳~近世				
55	庄之脇遺跡	散布地	中世				
56	木田城跡	城跡	戰国				
57	木田遺跡	散布地	平安~中世				
58	下烟貝塚	貝塚	近世				
59	前烟遺跡	散布地	戰~近世				

第2章 調査の成果・検出した遺構

第1節 基本層序

本遺跡の発掘調査区域は、標高15.5m～25.5mの緩斜面に広がっている。周辺に広がる水田面との比高差は緩斜面端の低いところ10mほどである。

台地の頂部であり遺構面を覆う土層は、全体に薄い。北西の高い方から南東の低い方へ向かって順にみていく。

I区（図2参照）では、遺構確認面の褐色粘土層上に、遺物と粘土ブロックの混入する約20cmの褐色土が、その上に耕作土の黒褐色土が約20cmほどの厚さで堆積する。II区では、遺構面が灰オリーブ色粘土層に変化し、その上を遺物の混入する耕作土の黒褐色土が20cm～30cmの厚さで覆う。III区・IV区では、遺構面の黄褐色粘土層上に、厚さ10cmほどの暗褐色が覆うのみである。

ついで、北東の方向に下がっていくと、中ほどでは厚さ20cm前後の明褐色粘質土と、その上に厚さ10cmほどの黒褐色土が覆う。北東の台地緩斜面の端側では、遺構面上に厚さ20cm～30cmの灰黃褐色土が覆う。この上層は、遺構面を掘り起こしたものとみられる。溝、土坑及び小穴の覆土は、遺構面と同質の粘土層が硬くしまって入り込んでいる。

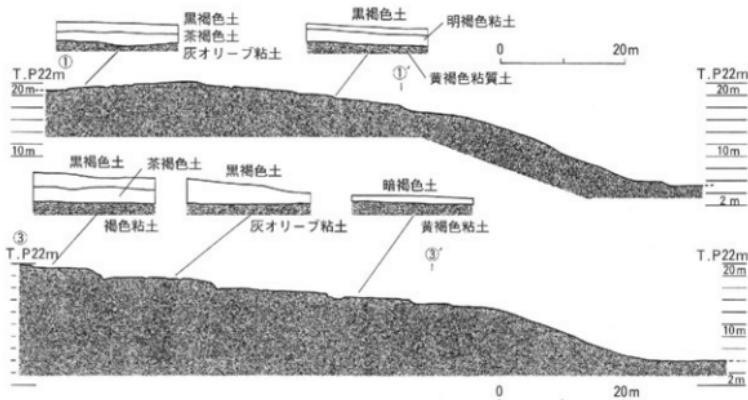


図2 基本層序図

第2節 弥生時代の遺構

条痕紋土器出土の小穴 [土坑]

(III p i t 1 = 図3)

III区北部の緩やかな傾斜面にうがたれたもので、長径1m、短径0.8m、深さ15cmほどの大きさである。そこから、条痕紋を施す甕形土器と壺形土器が出土した。この東に、長径1.1m、短径0.9m、深さ15cmほどの大きさの無遺物の穴が付随する。

この時代の遺構としては、一ヵ所のみであるが、条痕紋の土器は、この遺構周辺と、IV区の北半部から各2片見つかっている。

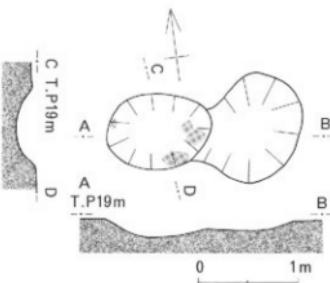


図3 条痕紋土器出土小穴
(網目が土器分布範囲)

第3節 古墳時代の遺構

1 須恵器包含層の分布 (図4)

IV区SX1において、高坏と坏類の須恵器がまとまって出土し、その包含層がIV区の平坦面にも分布する。この層は、黒褐色の粘土層で、よく締まって硬く、ほかの土層と異なり割合明確に分離検出できた。分布する範囲は、IV区SX1の東部と、IV区SD3の北に広がる浅いくぼみとそれに連なるIV区SK5（高坏片出土）の二ヵ所である。

遺物としては、IV区SX1にまとまりをもつみである。ほかには、II区南端（20=図版の遺物番号を示す）・III区のSD1・SD2・IV区のSK8・SX2（21・22）から数片見つかっている。

2 古墳（弥勒寺古墳）の存在？ (図5)

わずかな状況証拠ではあるが、古墳の石室があったと類推できるIV区SX1地点についてふれる。

石室の存在を類推した理由は、次のとおりである。

- ① 石室を構築していたとみられる石材が残る。
- ② ほとんど破損せず完全な形でのこる須恵器が、整然と並んで列をなしている。
- ③ 須恵器を出土する包含層の広がりが、一定である。

IV区SX1とした広い範囲の落ち込みのほぼ中ほどにいくつかの石が並んでいる。北東から南西に向かって並んでおり、北東の石は、長さ50cm・幅30cm・厚み20cmほどの四角い花崗岩、これに連なるのは、長さ40cm・幅20cm・厚み15cmほどの細長い濃飛流紋岩の丸い石である。この石列より南東寄りに須恵器を包含する黒褐色の粘土層が広がっている。石列より2mほど離れたところで、須恵器が、坏蓋（1）・坏身（2）・坏蓋（3）・高坏（4）・坏身（5・6）・土師器高坏（7）の順で一列に並んでいる。その延長線上の3.5mほど離れたところに坏蓋が2点（8・9）置かれている。図5のA点-B点間の土層断面をみると、

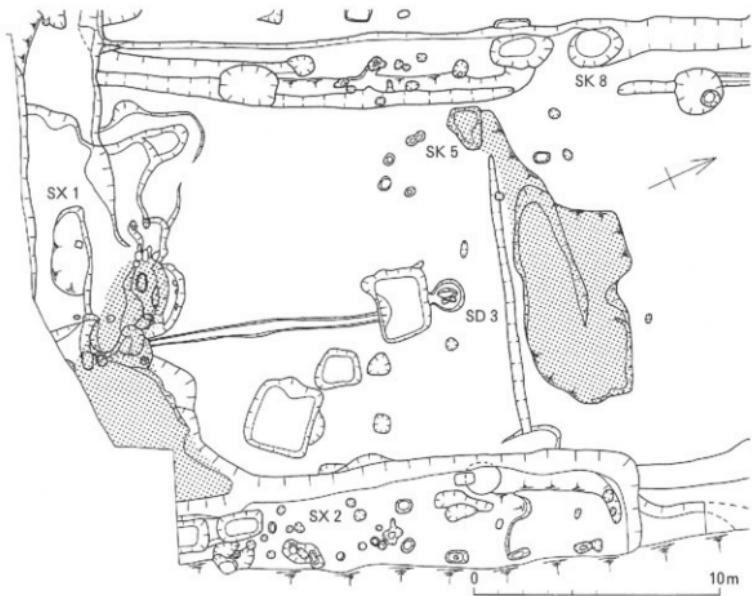


図4 IV区実測図（須目が須器包含層）

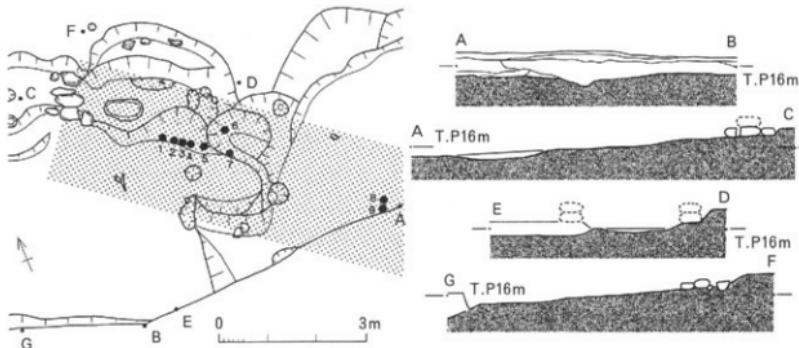


図5 古墳の石室想定図

須器を包含する黒褐色粘土層が途切れるところがある。このあたりを境とみて石室の規模を想定すると、幅が2.5mほどになる。ちょうどこの周囲に割れた石がいくつか点在する。

以上のような状況しかなく、さらに戦国期の堀り込みがいくつかあって明確ではないが、一応、古墳の石室が存在した可能性を想定しておく。

第4節 中世の遺構

1 平坦面の造成 (図版2参照)

発掘調査区域の地形は、北東部と南西部に大きく分けられる。北東部は、緩やかな傾斜面で、旧地形をほぼそのまま残している。南西部は、北西から南東に向かって下がる五段の平坦面（I区・II区・III区・IV区・IV区SX2）が形成されている。発掘調査の結果、これらの面が分かったのであるが、調査以前の地形からは、三段しか認めていなかった。すなわち、北西から一段目がI区とした面・二段目がII区とした面・三段目がIII区とIV区とした面（段差のない緩やかな斜面であった）である。そして、三段目の南東の端からは、台地の裾に向かって急に下がっていた。これら三段の平坦面は、タマネギなどの野菜畑として使われており、二段目の南西部は柿の木畠となっていた。これらのことから、比較的新しい時期に造成された段々畑だろうと考えていた。しかし、調査の結果、後述するように五つの段は戦国期に造成されたものであることが分かった。以下、それぞれの平坦面の遺構についてみる。

2 I区の遺構 (図6・7)

I区は、南西側の一段高い平坦面と、北東側の緩斜面に区分できる（図版2）。南西側の一段高い平坦面は、北西側が10cm～20cmほど高くなっている。この高まりは未調査区域の側に広がっており、詳細は不明である。

西端に炭化物が大量に混じる落ち込み（ISX1）がある（図6）。この底面に、一辺30cmの方形の小穴が三カ所（I pit 2・3・6）と一辺50cmの方形の小穴が一カ所（I pit 1）設けられている。うち二カ所（I pit 2・6）には、四角形の石が置かれている。そして、この底面には、炭化物のみが堆積する部分もある。この炭化物は、^枝節のある直径1cmほどの植物で、^茎葉の類のようである。このほか、焼けて赤色、橙色、灰色、黒色などに変色して破損したさき混じりの粘土の塊が大量に混じっている。この塊には、片面に格子に組まれた芯材の痕跡があり、壁土であったとみられる。炭化物と焼土塊は、南西の落ち込み（I

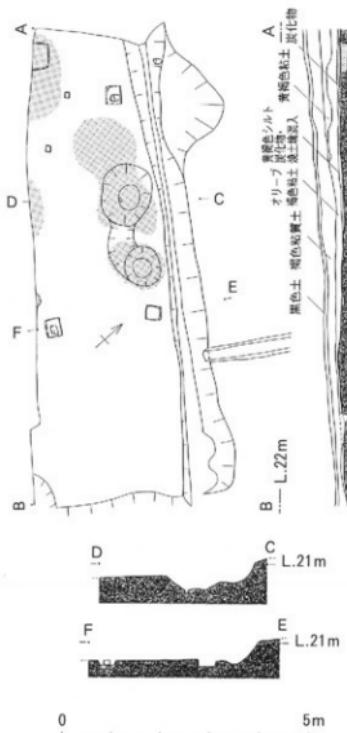


図6 I区SX1実測図

S X 5) にも広がる。

このことから、葺葺きの壁土をもつ建物が火災によって崩壊したのではないかと考えられる。先の、方形小穴が建物の土台のようにも考えられるが、特定はできない。

I 区中ほどに北西から南東にかけてわずかに下がる不定形の溝（深さ20cm～30cm）が二条（I S D 1とI S D 2）伸びている。I S D 2には、長辺2m・短辺1.1m・深さ8cmほどの隅の丸い長方形の土坑があり、この底面から瀬戸美濃窯陶器の丸皿（大窯II a期）が出土した。

また、平坦面の北東端付近に、炭化物と赤色焼土塊を混入する小穴が二カ所（I S X 2・6）認められる。I S X 6には、一方の端に扁平な石（？）を立てかけていた痕跡がある。

この平坦面と、その北東に伸びる緩斜面には、60cmほどの段差がある。平坦面の下端から3mほど離れたところに、二条の溝（I S D 3・S D 4）が設けられている。その周辺の土坑は、木の根を掘り起こした穴である（聞き取りによる）。この溝より北東の側からは、遺物はほとんど出土しない。

3 II区の遺構（図7・8・9・10・11）

II区も I区同様に南北半分が平坦で、北東半分が緩斜面である。寺伝（口碑）では、山門の真北にあたるこの地点に寺院があったとされるところである（図版2参照）。

南西部の平坦面からみていくと、I区の平坦面より1.5mほど低い。I区との境から北西にかけて溝（II S D 8・S D 9）がほぼ直角に巡る。深さは概ね、II S D 8が40cm、II S D 9が25cmで、区画して整然と掘削された状態のものではない。II S D 8からは、数多く遺物が出土した。特に、南北半分に密集しており、I区の平坦面の肩から溝内にかけて、かたまっている。I区の平坦面から投棄されたようである。遺物としては、天目茶碗・土師皿・羽付鍋などで、手づくねの土師皿が多い。これに比べて、II S D 9の溝には、遺物はほとんどない。溝と段で区切られた平坦面の規模は、24m×16mほどである。

平坦面には、数多くの小穴、土坑がうがたれているが、植栽などによる比較的新しい時期のものもあり、主に穴内に堆積した覆土によって古い時期のものを限定すると、図7のようになる。

やや北西に偏するが平坦面のほぼ中央に、刺しの状態で宋銭を埋納する方形の穴（II p i t 1）がある。このP 1（図8）は、一辺約90cm・深さ40cmの大きさである。ここに、淳化元宝などの宋銭91枚が一刺しの状態になったものが埋納されていた。ほかに、底面に5枚の宋銭と数個の濃飛流紋岩の割れた角石がある。この石には、火熱を受けた痕跡の認められるものもある。覆土の最も上層には、焼土塊・炭化物・土師皿・内耳鉢・常滑鉢が混入している。

II P 3は、長径が70cmほどで深さが50cmほどの不整形の円形穴が、三つ組合わされた状態のものである。覆土に、焼土塊が混入している。

II P 4（図9）は、鉤形の不整形で、ほぼ中央の最も深いところが、直径約30cm・深さ90cmを測る。覆土の灰褐色粘土層には、焼土塊・土師皿・内耳鉢が混入している。

II P 5は、一辺が40cmと60cmほどの長方形で、深さは約20cm。底面から土師皿と炭化物が出土している。

II P 6は、一辺90cmほどの正方形で、深さは約10cm。底面から羽付鍋が出土している。

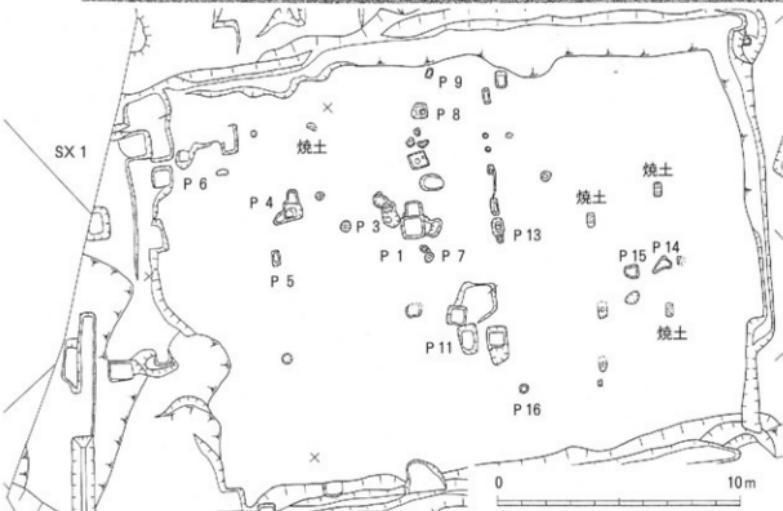


図7 II区南西部実測図

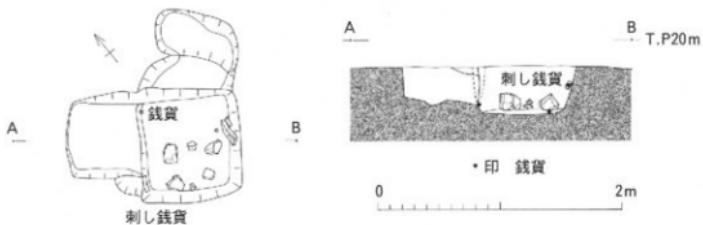


図8 II区pit1実測図

II P 7は、直径30cm・深さ20cmほどの円形穴が二つ並んだものである。II P 8は、一辺60cmほどの方形で、深さが70cmあり、この穴とP 4が深い。覆土には、土師皿・天目茶碗・鉄軸縁掛けの丸皿が混入している。II P 11は、深さ約35cmで、底面から鏡片(図14-10)が出土している。II P 12は、深さ約20cmで、底面から羽付鍋・内耳鍋が出土している。

II P 13は、深さ30cm(南東側)と40cm(北西側)の円形の穴が連結し、覆土には、土師皿・焼土塊が混入している。II P 14(図10)は、不整形の三角形状で、完形の土師皿(108)の入った内耳鍋(153)が、底面に置かれている。II P 16は、直径30cm、深さ35cmの円形穴である。

また、焼けて真っ赤に変色した焼土面が、II P 4の西3.5mとII P 14の南東2m・北西3m・西3.5mの四カ所に認められる。

このほか、西端に階段状の遺構(II SX 1)がある。二段あり、横幅・奥行きともに約1mで、段の高さは20cmほどである。それぞれの段には、割れた石と瓦片が残っている。割れた石には、火熱を帯びて赤色や黒色に変色したものも認められる。この地点が、台地の頂部あたりに位置する平坦面にたどり着く通路であったと考えられる。

以上が、II区平坦面において最も古くがたれた戦国期の穴類である。このうち、II P 1が平坦面のほぼ中央に位置することと、刺しの銭貨を埋納することからみて、建物の心礎的な意味合いを持つのではないかと考えられるのであるが、堀り込まれた穴の関係からは、建物の遺構を明確に特定することはできなかった。ただ、この地区は厚さ15cm~20cmほどの割合大きな扁平な丸い石の火熱を帯びて割れたものが数多く散布しており、こうした石が建物の基礎石として置かれていた可能性もあり、建物がなかったと断定することもできない。

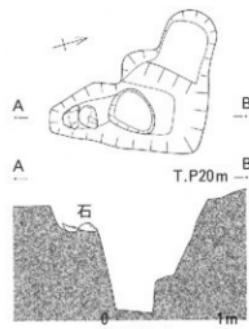


図9 II pit4実測図

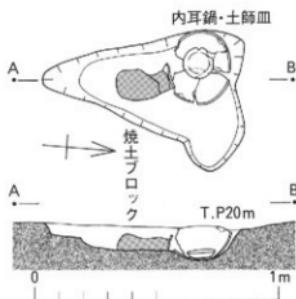


図10 II pit14実測図

北東半分の緩斜面側についてみると、溝（Ⅱ S D 9）に平行するように等間隔の穴がうがたれている。これらは、最近まで木瓜が植えられていた跡である。遺物の出土はほとんどなく、端に一条の溝（Ⅱ S D 7）がある。長さが11.5mで、幅は1m～1.3m、北西（深さ40cm）から南東（深さ1m）に向かって下がる。溝内は無遺物で、時期は不明である。覆土が、溝の堀り込まれた地山面の地質とほぼ同じであり、地表面の黒色の有機質土が全く混入していない。南西平坦面の南端にある長細い土坑（Ⅱ S X 2）も、覆土の状態がⅡ S D 7に類似する。その規模は、長さ4.5m・幅90cm・深さ70cmで、整然とした形態である。ともに覆土の状態からみて古い様相がうかがわれるが、遺物が全くなくて時期は特定できない。

4 Ⅲ区の遺構（図版2）

Ⅲ区と次に述べるⅣ区は、調査前の地表面では段差が認められず、南東に下がる一体の緩斜面となっていたところである。

Ⅲ区もⅠ・Ⅱ区同様に、南西部の平坦面と北東部の緩斜面で様相が異なる。

南西部の平坦面は、南西端が斜面となっているが、これは元々の地形ではなくて、平坦面が造成された後に削平されたものとみられる。Ⅰ区の平坦面より1.8mほど低い。Ⅱ区との境に不整形な溝（Ⅲ S D 1）が設けられている。深さが約20cmで、一部で二条が平行する。この溝からは、常滑窯甕・内耳鍋・羽付鍋・手づくねの土師皿などのほか、須恵器の甕が出土しているが、細片化したもので量も少ない。また、Ⅱ区から下がる肩の面から、羽付鍋・ロクロ調整の土師皿・焼土塊がわずかに出土している。北東の緩斜面との境にもⅣ区にまで連なる溝（Ⅲ S D 2）がある。Ⅲ S D 2は、幅1m・深さ60cmほどで、Ⅳ区側に向かって緩やかに下がる。この溝からは、羽付鍋・砥石・火熱を受けた割れ石などのほか、須恵器のはう・短頸壺が出土しているが、細片化したもので量も少ない。溝と段で区切られた平坦面の規模は、残存する長辺23m×13mほどである。

この平坦面にも、いくつかの土坑（SK）と小穴（pit）がある。Ⅲ SK 1は、長辺2.8m・短辺2.2m・深さ15cmの長方形で、覆土から内耳鍋・ロクロ調整の土師皿・焼土塊が出土している。Ⅲ SK 2は、長辺1.5m・短辺1.1m・深さ20cmの長方形、Ⅲ SK 3は、長辺1.3m・短辺1.1m・深さ20cmの長方形である。Ⅲ SK 4は、長辺1m・短辺0.7m・深さ20cmの長方形で、土師質釜が出土している。Ⅲ SK 5は、一辺2m・深さ20cmの不整形ではあるが方形状の土坑で、主に東端の掘方から内耳鍋・羽付鍋・ロクロ調整の土師皿・常滑窯甕と鉢が出土している。

Ⅲ P 2は、直径約40cm・深さ20cm、Ⅲ P 7は、直径約40cm・深さ24cmで、ともにロクロ調整の土師皿が出土している。Ⅲ P 3は、長径約80cm・短径50cm・深さ40cmで、ロクロ調整の土師皿・羽付鍋・焼土塊が出土している。Ⅲ P 4は、直径約50cm・深さ28cmで、サビ釉すり鉢が出土している。Ⅲ P 5は、長径約80cm・短径50cm・深さ40cmで、ロクロ調整の土師皿・羽付鍋・焼土塊が出土している。Ⅲ P 6は、直径約40cm・深さ12cmで、穴の中全体に炭化物が埋まっている。

北東部の緩斜面からは、条痕紋土器の穴（Ⅲ p i t 1）のほか、ほぼ直角に交わる溝（Ⅲ S D 4とSD 3）を検出した。Ⅲ S D 4から、常滑窯鉢が出土している。このほか、SD 2とSD 4間の地山面から、条痕紋土器・須恵器壺・土師皿・内耳鍋・焰烙鍋・天日茶碗・常滑窯鉢が出土している。Ⅰ・Ⅱ区の緩斜面にはほとんど遺物が無かったのであるが、それに比べてこの面は遺物が多い。

5 IV区の遺構 (図4)

(1) 平坦面

III区の南東に連なる平坦面で、III区より1mほど低い。III区との境には溝が設けられていない。III区の段と平行に溝(IVSD1とIVSD5)が走るが、これらはともに、後世に設けられたものである。その時期は、IVSX1とIVSD4が完全に埋没した後である。北東にIII区から連なる溝(IVSD4)があり、段と溝で区切られた平坦面の規模は、27m×15mほどである。南西と南東の端に、落ち込み(IVSX1とIVSX2)がある。III区からIV区に下がる段の肩面から、内耳鍋・土師皿・灰釉皿・天目茶碗・常滑窯鉢・火熱を受けた割れ石・焼土塊出土している。その出土量は多くない。このほか、知多式製塙土器4類・山茶碗(13世紀代)が混入している。

この平坦面にも、いくつかの土坑(SK)と小穴(pit)がある。IVSK1は、長辺2.3m・短辺1.6m・深さ35cmの楕円形である。覆土から内耳鍋と土師皿が出土している。IVSK2は、長辺2.8m・短辺2.5m・幅2.1m・深さ40cmの台形で、覆土下層に炭化物と焼土塊が混入する。この遺構とIVSX1を結ぶように深さ7cmの溝(IVSD2)がある。

IVSK3・IVSK4とIVSK6は、遺構内に堆積する覆土(黒色土)からみて、中世期よりは新しい時期のものである。

IVSK5は、長辺1.8m・短辺1.4m・深さ37cmの不整形な土坑で、須恵器の高壺などが出上り、覆土下層も異なることからみて、古墳時代の遺構である。

IVSK7は、長辺2.5m・短辺1.4m・深さ53cmの楕円形である。底部から火熱を受けた割れたものも混じる石が数多く出土している。IVSK8は、長辺2.5m・短辺1.7m・深さ40cmの楕円形である。底部から内耳鍋・羽付鍋・土師皿・台付碗・天目茶碗・サビ釉すり鉢・大形瓶・常滑窯鉢・挽き臼・火熱を受けた割れ石も含む石・焼土塊が出土している。このほか、知多式製塙土器4類・山茶碗(13世紀代)も混入している。IVSK9は、直径1.8mのすり鉢状で、深さは60cmほどである。覆土から内耳鍋・加工円盤・焼土塊が出土している。

IVP1は、直径約40cm・深さ25cmの穴が二個合わさったもので、炭化物と焼土塊が堆積する。IVP2は、長径60cm・短径50cm・深さ28cmで、挽き臼(212)を入れ込んでいる。IVP3は、直径約50cm・深さ20cm、IVP4は、直径約50cm・深さ20cm、IVP5は、直径約40cm・深さ43cmで、ともに炭化物と焼土塊が混入する。

IVSD4の溝より北東は、他区と同様に緩斜面が続くようであるが、後世に1.2mほど低く削平されて段々畑となつており、不明である。

(2) 落ち込み(IVSX1) (図11)

IV区平坦面の南西端に広がり、平坦面より80cmほど低い。平坦面との境が不整形のように見受けられるが、III区側に伸びる北西端をみると四角形に区画されており、南西端にも整然とした平坦面が広がっていたものとみられる。現存する幅は3mほどで、その端は宅地として削り取られている。このIVSX1の平坦面からは、五輪塔が出土しており、寺院の様相を色濃く漂わせる。遺物としては、砥石・銭貨・瀬戸美濃窯製品・常滑窯製品・割れ石などがあるが、特に常滑窯製品と割れ石が目立つ。また、素焼きの土師質製品は少なく、ロクロ調整と手づくりの土師皿・羽付鍋がわずかに認められるのみで、内耳鍋がない。

図11のA点-B点断面部分が、不整形ではあるが、階段状になつており、IVSX1の平坦面とIV区平坦面との通路ではなかつたかとみられる。

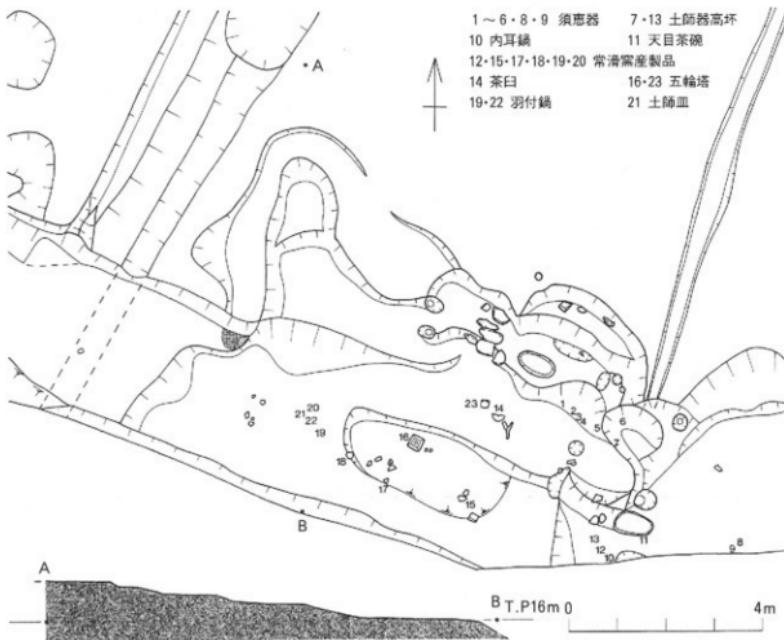


図11 IV区 SX 1 実測図

(3) 落ち込み (IV SX 2) (版図2)

IV区平坦面の南東端に広がり、平坦面より1.3mほど低い。南東端が削り取られており、現存する幅は3mほどであるが、実際はもっと伸びていたとみられる。それにしても、地形から判断して、10mまでである。北の端が、四角形に区画されている。

IV区平坦面との境の堀り肩から、主に内耳鍋・羽付鍋がまとまって出土した。底面には、部分的にではあるが、炭化物層が広がっている。

この平坦面にもいくつかの土坑と小穴がある。うち、土坑SK10から内耳鍋・土師皿などが、小穴P3から凝灰岩製の扁平な砥石(26)が、P4から凝灰岩製の挽き臼(215)が出土した。このほか、IV SX 2が完全に埋没した後で、近世以降の常滑赤焼きの井戸枠が、一個埋けられている。

第3章 調査の成果・発掘した遺物

第1節 弥生時代より南北朝時代までの遺物

本遺跡は、次節でふれる室町（戦国）時代を主な時期とするのであるが、当初の想定とは異なり、幅広い時代の多種多様な遺物が出土したので、まずこれらについてふれる。

1 弥生時代の土器（図版3-1~11）

条痕紋土器 図示したものは、Ⅲ区の北部に位置するpit（穴）1内から出土したものである。土器自体が脆弱化しており調整痕は不鮮明である。すべての破片が遺構面に密着して残存していることから、同時期のものと考えている。7のように底径が小さく立ち上がりの急なものが深鉢様の壺形土器、10のように底径がやや大きくて開き気味に立ち上がるものが壺形上器とみられる。条痕は割合幅が広くて、深く食い込んでおり、荒い感じのものである。壺形上器の口縁部6は、屈折して横に広がる。時期を推定できる資料は、小片の壺形土器6ぐらいしかなくて乏しいが、弥生中期前半に位置づけられよう。

2 古墳時代の遺物

土師器（図版3-12）Ⅳ区中央東端から台付壺形土器12が一個体見つかっている。土器自体がボロボロになって細片化しており、器形全体を復原することはできなかった。

このほか、I区及びII区の北部に土師器とみられる土器片が數点点在していた。

須恵器（図版3-13~22） 坏蓋13は、IV区S X 2の覆い土から出土した。天井部はやや丸みをもち、ほぼ全面に回転ヘラ削り調整を施す。口縁部はわずかに開き、端部は平坦に仕上げる。猿投窯編年（東山111号（H-111）窯式期（5世紀後半代）のものとみられる。この時期の須恵器としては、これ1点のみの出土である。

坏蓋14・16・坏身18・高坏19は、遺構面に一列に並んだ状態で出土した。このほか、図示できなかったが別個体の坏身2点と土師器の高杯形土器がある。この地点より南東に4mほど離れたところから坏蓋15・17が並んで出土た。これらは、坏蓋、坏身とも口径が大きく、天井部及び底部の二分の一ほどに回転ヘラ削りを施す。無蓋高坏19は、長い脚部で上段に長方形の下段に三角形の透かし窓を位置をずらして開け、上下間に二条の沈線を巡らす。

はそう20は、II区南端の覆い上から出土した。頸部は大きく外に開き、口端部を平坦に仕上げる。口縁部と頸部との境に凸帶によって段を巡らし、頸部に撚描きの波状紋を施す。

* 猿投孝正 1983：「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』86（史学29）

猿投孝正 1989：「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』第6回東海埋蔵文化財研究会

** 猿投孝正 1986：「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』2及び前掲前出1989

はそう21は、IV区S X 2の南方覆い土から出土した。胸部上方に二条の沈線とその上に斜めの列点紋を巡らす。これらは、坏類の口徑が最大となる猿投窯編年の東山61号（H-61）窯式期（6世紀前半代）のものとみられる。

鉢22は、底部が円盤状に張り出し、棒状具によって側面及び底面に刺突を加える。猿投窯編年の鳴海32号（N N-32）窯式期（8世紀後半代）頃のものとみられる。

3 古い様相をもつ遺物

伴出する遺物がなくて時期を特定できないが、古い様相をもつ資料について述べる。

石製品（図版3-23・24）23は楕円形の断面をもつもので、石棒とみられる。緑色片岩製。叩き石24は、両面ともほぼ中央に打痕によるくぼみがある。安山岩製。

瓦（図版3-34）丸瓦34は、灰色の硬質・緻密な製品で、内面に縦目の叩き、凹面には布目痕が残り、端部にヘラ削りによる調整を加える。

製塙土器（図13-5・6）知多式製塙土器4類の脚で、この形態の使用時期は7世紀後半代から9世紀代までと長い。本遺物は、先に述べた須恵器鉢22に伴うものであろうか。

4 鎌倉時代（13世紀）～南北朝時代（14世紀）の遺物

常滑窯産陶器【無釉の焼き締め陶器】（図版4-36～38・40・図版11-198）

当地方の知多丘陵に営まれた常滑窯の製品がほんの少し認められる。

小皿36～38は、体部の立ち上がりが短くて、器高が低くなり、扁平化する時期のもので、4型式期～5型式期（13世紀前半を中心とする）の製品である。山茶碗40も同時期のものとみられる。198は、大型の甕で肩部とみられる部位に押印紋がある。格子紋で、その特徴からみて、13世紀代のものとみられる。

このほか、13世紀から14世紀代の大甕の破片が、II区南方と中央、IV区S X 2から出土したが、遺物の出土量は極めて少ない。

瀬戸美濃窯産陶器（図版4-42）42は皿とみられる、糸切り底で断面四角形の高台を付ける。底部と高台を除く部分に灰釉をかける。古瀬戸後期様式の初め窯窓III b期（14世紀後半代）のものとみられる。この期の遺物の出土量は、図示できるものとしてもこの1点のみで、わずかである。このほか、図示できなかったが窯窓II a期（13世紀前半）のものとみられる灰釉瓶子がIV区のS X 2から出土した。

* 萩藤孝正 1994：「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3－施釉陶器の生産と消費』古代の土器研究会

* * 中野晴久 1994：「赤羽・中野『生産地における編年について』」『中世常滑窯をとて』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所

* * * 中野晴久 1992：「中世知多古窯址群押印文－ミクロ流通史のための予備的研究－」『知多半島の歴史と現代』No.4 日本福祉大学知多半島総合研究所

* * * 井上喜久男 1992：『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社

参考文献 森澤良祐 1991：「瀬戸古窯址群I－古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』

以下、窯窓期の編年については上記文献による。

第2節 室町（戦国）時代の遺物

1 濑戸美濃窯産陶器・窖窯期（古瀬戸後期様式）

おろし皿（図版4-43・44）43は、折線の皿で灰釉を縁掛けする。44は、糸切り痕未調整の平底で、体部は欠損する。ともに窖窯IVa期の15世紀初めのものとみられる。

壺（図版4-45～48）45は四耳壺あるいは三耳壺である。頸部はほぼ直立し、口縁部は折り返されて縁帯を作り出す。頸部に沈線を一条巡らす。外面から頸部内面にかけて灰釉を施す。48は広口形の瓶子あるいは四耳壺である。体部には轆轤目が顯著で、下端にヘラ削りを施し、底面は糸切り痕が残る。内外面に鉄釉を施す。焼成後、底部を打ち欠いて穴を開けている。これらは、窖窯IVa期の15世紀前半のものとみられる。

このほか、この時期の四耳壺あるいは三耳壺が、Ⅲ区のⅢSD1・Ⅲ区の肩下（Ⅳ区面）・Ⅳ区SX1から出土した。

46は四耳壺あるいは三耳壺である。頸部はほぼ直立し、口縁部は折り返されてやや尖った縁帯を作り出す。粘土ひもひねりの耳を縱に付ける。器表面から頸部内面にかけてサビ釉を施し、紫の発色である。47は口縁端部を平坦に作り出す。頸部に一条、沈線を巡らす。器表面から頸部内面にかけて鉄釉を施す。これらは、窖窯IVb期の15世紀後半のものとみられる。

このほか、この時期の四耳壺あるいは三耳壺が、Ⅱ区のSD10から出土している。

鉢（図版4-49）鉢の類で、胸部下方及び底部外面に回転ヘラ削り痕が残り、高台を付ける。内外面とも鉄釉をハケ塗りする。

燭台（図版4-50）残存する上面がちょうど接合面で、剥離している。器表面には鉄釉を施す。窖窯IVb期の15世紀後半代のものとみられる。

仏供（図版4-51）台部底面に糸切り痕が残り、そこにハケで鉄釉の点を加えている。窖窯IVb期の15世紀後半代のものとみられる。

天目茶碗（図版4-52）口唇部がほぼ直立する。底部を欠損する。窖窯IVb期のものとみられる。このほか、この時期の高台周辺にサビ釉の鉄化粧を施す天目茶碗が、Ⅳ区のIVS X2から出土した。

すり鉢（図版5-78）口縁部内側に突起が作り出され、外面には轆轤目が顯著である。全面にサビ釉を施す。窖窯IVb期のものとみられる。このほか、鉄釉締掛けのすり鉢が、Ⅱ区のSD8から出土した。

このほか、窖窯IVa期の15世紀初めのものとしては、鉄釉を縁掛けする丸皿が、I区のSX5から、灰釉を施す柄付片口と瓶子が、II区のSD8の上面から出土した。

中国廉産磁器（図版11-210）青磁の香炉で、15世紀代（明）のものとみられる。このほか、同時代のものとみられる青磁香炉と青磁碗が、IVSX2から出土した。

IV区の北部からは、白磁の玉縁碗が2点見つかっている。

2 濑戸美濃窯産陶器・大窯I・II期

本遺跡ではこの大窯期の製品が、最も多く出土している。ただ出土量としては、多くはない。それと、陶器といった硬い製品の割には、破損の度合いが大きい傾向を示している。

山茶碗（図版4-41）体部が直線的で浅く、底面は糸切り痕未調整である。胎土は白色で無釉である。大窯Ia期のものとみられる。

天目茶碗 (図版4-53~65) 53・56・60・62は、体部下方(腰部)に丸味を帯び、口縁端部を短く折り返す。57・58・61・63は、口唇部がややくびれる。すべて糠籠水引き成形で、体部下方から底部にかけて回転ヘラ削りによって整形する。高台は削り出し輪高台で、高台内の削り込みは浅い。54・55・59・64は高台のみ残存する資料であるが、同類のものとみられる。54・56・59の高台周辺にはサビ釉によって鉄化粧される。これらは、大窯Ia期のものとみられる。

このほか図示できなかったが、この期のものが、I区のSX5から1点(高台周辺にはサビ釉によって鉄化粧)・II区南側から3点(内1点は高台周辺にサビ釉によって鉄化粧)・II区中央から1点が出土した。

65は、体部の立ち上がりが直線的で強く、口縁部は直立する。大窯Ib期のものとみられる。

台付碗 (図版4-66~68) 66は、体部下方(腰部)に丸味を帯び、口縁部に平坦面を作り出す。サビ釉を体部内外面にかける。台部は大きく張り出し、糸切り痕未調整である。67の体部も66と同様である。大窯Ia期のものとみられる。

68は体部の立ち上がりが直線的で強く、台部の径も小さい。台部底面に至るまでサビ釉を総掛けする。底面は、糸切り痕未調整である。大窯Ib期のものとみられる。

皿 (図版4-69~71) 69はいわゆる端反皿で、体部下方はやや丸味を帯び、口縁部は緩やかに外反する。底面内面に印花紋を押印し、灰釉を底面外面に至るまで全面に施釉する。丸皿とみられる70は、底面内面に十六弁の菊花様の印花紋を押印し、灰釉を底面外面に至るまで全面に施釉する。小皿74は、糸切り痕未調整の平底で、口縁の内外面に鉄釉を総掛けする。これらは、大窯Ia期のものとみられる。

丸皿71は、底面内面に六弁の印花紋を押印し、灰釉を底面外面に至るまで全面に施釉する。底面外面に重ね焼きの輪トチン瓶が残る。大窯IIa期のものとみられる。

このほかこの期の灰釉総掛けのものが、I区SK5・II区南側(印花紋あり)・IV区SK3・IV区SK5・IV区SX1(印花紋あり)・IV区SX2(印花紋あり)から出土した。

大形瓶 (図版4-72) 胴部は丸味をもち、頸部は細長く伸び、口縁部は横に広がってラッパ状をなす。鉄釉を施す。大窯Ia期のものとみられる。

平碗 (図版4-73) 体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り整形され、削り出し輪高台である。全面に鉄釉を施す。大窯Ia期のものとみられる。

筒形容器 (図版4-75) 胴部上方を欠き、全形を知り得ないが、筒形をなす。内面に三ないし四カ所に横ビンを設けており、窯道具の匣鉢(さや)のようにも見受けられるが、内外面に鉄釉が施されており、口径の大きい製品(双耳壺か)内に重ね焼き用のビンを付けて、皿とともに焼成したものとみられる。底面は、糸切り痕未調整である。大窯I期のものとみ

*井上喜久男 1992:『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社

参考文献 藤澤良祐 1986:「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』

以下、大窯期の編年については上記文献による。

られる。

茶入（図版4-76）細かい櫛目を加える肩の張った胴部に、短く立ち上がる頸部を付け、内外面にサビ釉を掛ける。大窯Ⅰ期のものとみられる。

大形容器（図版4-77）胴部にくびれを持つ容器で、くびれ部に「○」に「×」を加えた円形の浮紋を付ける。全体にサビ釉を掛け、外面は茶色、内面は紫色の発色である。胎土は、砂粒の混入が多くて粗く、ざらつとした器表面である。大窯Ⅰa期のものとみられる。

すり鉢（図版5-79~89）81・82は、口縁部が折り返されて丸く取まる。79・83・84・85は、体部がそのまま伸び、口縁部がわずかに厚くなり斜めの平坦面を作り出す。83の櫛目は、6本を一単位とする。86は口端部下方が、わずかに垂下して、縁帶を作り出す。櫛目は、10本を一単位とする。80は底部で、櫛目は、8本を一単位とする。すべて、全面にサビ釉を掛けた。これらは、大窯Ⅰa期のものとみられる。

このほか図示できなかったが、この期のものが、I区のSX5・I区の西端・I区SD8・II区SD1・IV区SK8・IV区SX1・IV区SX2から各1点が出土した。

87・88・89は、口縁端部がほぼ垂直に伸び、下方が垂下して幅広の縁帶を作り出す。88には、縁帶を指で摘んだ片口を作り出す。櫛目は、15本前後を一単位とする。すべて、全面にサビ釉を掛けた。これらは、大窯Ⅱa期のものとみられる。

3 土器

土師器皿・ロクロ調整（図版4-39、図版5-90~121）

口径をみると、7cm代の小型のもの・10cm代・11cm代・12cm代・13cm代・14cm代のまとまりがある。口径・深さの違い以外に、器形の違いがある。体部が底面から丸味を帯びて立ち上がり口縁部が開いて丸く取まるもの（92など）と、垂直で平坦な面をもつものの（110など）がある。また、体部が底面から直線的に斜めに立ち上がり口縁部が尖り気味に取まるもの（96など）がある。このほか、底部が高台様に張り出すもの（120・121）がある。全体としては、口径が11cm代のものが多い。

伴出する瀬戸美濃窯陶器類の編年時期からみて、16世紀前半を中心とするものである。

土師器皿・非ロクロ調整【手づくね】（図版5-122~148）

口径をみると、5cm代・6cm代・7cm代・8cm代・9cm代のまとまりがある。外面には、指頭や手のひらの痕が残るが、内面は平滑に仕上げる。口端部に丸味をもつものの（123など）と、平坦面を作り出すものの（126・127など）がある。122のように、器高が7mmで深さが2mmしかない扁平なものもある。全体としては、口径が6cm代のものが多い。

伴出する瀬戸美濃窯陶器類の時期からみて、16世紀前半を中心とするものである。

内耳鍋（図版6-149~160、図版7-161~168、図版8-169~173・175~177）

器形には、底面と体部の境が不明瞭な半球形のものと、底面と体部の立ち上がりの屈折が明瞭で逆台形状となり、三足を付けるものとがある。ともに、口縁部内側上方に一対の内耳を付ける。内耳は、半球形で丸味をもって内側に張り出し、棒状具によって孔を開けている。体部外面は、指押さえによる浅いくぼみが残り、底面との接合部をヘラ削りによって整形・調整する。体部上方に浅い沈線を巡らすもの（一条=152・159・165・173、二条=175）もある。内面はナデやハケ調整（152・166など）によって平滑に仕上げられている。口縁部は、体部より厚く作り出され、口端面は、平坦ないしわずかにくぼんで、内側に張り出さ

のが多い。

半球形のものも詳細にみると、底面と体部の丸味が異なって、その境目で屈折するもの（153・155）、底部が突出するもの（157）、口縁部が直行気味に立ち上がるもの（152）がある。

これらのはほとんどが、Ⅱ区のSD8とⅣ区のSX2からの出土であり、これに伴う瀬戸美濃窯陶器類の編年時期からみて、16世紀前半代のものである。

羽付鍋〔茶釜〕（図版8-174）

口縁部の高いもので、体部上方の肩のところに一対の釣り手用の外耳を付ける。体部中程に鈎（羽）を付けるものとみられる。15世紀後半代に位置づけられるものである。

羽付鍋〔羽釜〕（図版9-178～184、図版10-186～192）

体部は半球形で、最大径が上方にあり、その上に鈎を付ける。体部と底面との接合部は、ヘラ削りによって整形し、体部には指押さえの浅いくぼみが残る。内面は、ナデやハケ調整によって、平滑に仕上げる。鈎上方の口縁部が、丸味をもって内傾するもの（178・179など）と直立するもの（180・181など）がある。口縁部は体部より厚くなり、口端が最も厚い。口端面は、わずかにくぼみ、内側に銛く張り出すものが多い。180のように、口端面が傾斜して外側に銛く張り出すものもある。

鈎は、水平に付くものが多いが、179のように下向きになるもの、184のように上向きになるものもある。鈎の端面も178のように斜め上向きになるもの、183のように垂直になるもの、181のように斜め下向きになるものがある。178には、体部に鈎を接合したときのヘラ押さえが残る。

内耳鍋同様、これらに伴う瀬戸美濃窯陶器類の編年時期からみて、16世紀前半代のものである。

羽付瓶？（図版9-185）

羽付鍋と同じ器形で、底部が開口する。体部下端が丸味をもって收まり、径23.5cmの大きさで開口する。外面下端はヘラ削りによって整形する。鈎の下方には煤が付着するものの、底の部分が剥離した痕跡は認められず、図示した形態の底部が開口する製品である。羽付鍋と同時期のものとみられる。

火鉢？（図版3-30）

瓦質の焼き物で、外面は平滑に仕上げるが、内面には指による整形痕のくぼみが残る。脚を付ける方形の火鉢ではないかとみられる。

4 常滑窯産陶器

鉢類（図版11-193・194・204～206）193は、口縁部の平坦面が外側に張り出す。206は、口縁部に回転ナデ調整を加え、口端内側が突起様に張り出す。外面には指頭等の痕が残るが、内面はナデ調整によって平滑に仕上げている。ともに片口鉢である。これらは、15世紀の前半代、常滑窯編年の9型式期に位置づけられよう。

* 鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と壺そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

194は、口縁部にひだを付けて波状に作り出す。204・205は小形の鉢で、204は内面に細条線帯を「×」形に加える。砂粒の多い胎土である。205は口縁部が内側に折れ曲がり、先端が尖る。これらは、IV区のS X 1から出土しており、伴出する瀬戸美濃窯陶器類の時期からみて、16世紀前半代（常滑窯編年の11型式期）のものとみられる。

甕 （図版11-195～197・201～203・208・209） 201・202・203は、口縁部の縁帯が垂下して頸部に接合し、縁帯の幅が広い。195・199は、縁帯が頂部よりやや下がった位置に巡る。196・197は、口縁内側が角張った形になる。208・209は底部で、208は体部がくびれる。209は底径が大きく、体部の立ち上がりが緩やかである。

作られた時期としては、209が15世紀前半、常滑窯編年の9型式期、201・202・203・208が、15世紀後半、常滑窯編年の10型式期、195・196・197・199が、16世紀前半、常滑窯編年の11型式期に位置づけられよう。

壺 （図版11-200） 口縁部の縁帯を、方形に作り出す。15世紀後半から16世紀にかけてのものとみられる。

竈？ （図版11-207） 短い頸部をもち、体部の肩が張った器形である。破片を復原したものであり、焚き口となる抉りの部分は不明であるが、器形からみて竈であろう。

これに伴う瀬戸美濃窯陶器類の編年時期からみて、16世紀前半代のものとしてとらえられる。

5 石製品

硯 （図版12-1～4）

1はII区のS D 8から出土したもので、紀年銘を刻んでいる。長さ15.3cm、幅5.9cm、厚み1.9cmの長方硯で、内法は長さ14.1cm、幅6.1cmほどで隅を丸く作り出す。裏面に陸側から海側に向かって斜めにえぐりを入れる。このえぐり面と海側の真裏の平坦面に文字を刻んでいる。

海側の真裏の平坦面には、横向きに「天文十五年」（西暦1546年）、えぐり面に縦に「二（九かもしれない）十人ニテ候（ないしは作）」とある。

このほか、すべて別個体の長方硯とみられる破片が3点出土している。

石材は、1が凝灰質泥岩製、ほかは泥岩製である。

五輪塔 （図版11-211、図版12-216）

IV区のS X 1からのみ出土している。211と216は、花崗岩製の三角形で笠になる火輪の部分で、211は劣化が激しい。126の頂部には、半月形の風輪を乗せる円形のくぼみがある。

このほか、五輪塔頂部の宝珠形をなす空輪ないしは空輪と風輪が一体となったとみられる

*「天」の文字については上部を欠損するが、伴出する瀬戸美濃陶器の時期で15年まで数える年号が大文しかないことと、文字自体の動きからみて「天」と読みとった。

**九の字の「ノ」の画が刻まれていた可能性もある。すなわち、ちょうどその位置が傷によって欠損しているからである。

***刻まれた文字の判読には、福岡猛志（日本福祉大学）、島居和之（名古屋市博物館）氏等の御教示をいただいた。

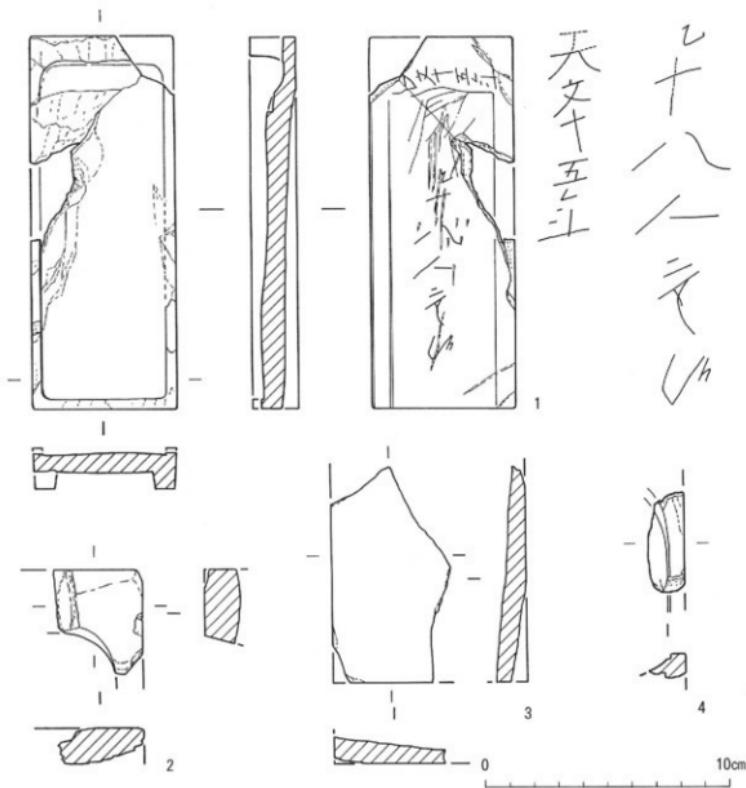


図12 観実測図

花崗岩製の石塊も伴出した（これは、取り上げ後、崩壊して砂粒化してしまった）。

²¹²
²¹³
挽き臼　（図版12-212~215）

212・213は、茶白の上臼で、上面にくぼみ面をもち、中央に円形の芯穴をうがつ。側面のやや下方に一対のはぞ穴をうがつてある。214には溝が認められる。215は、受け皿をもつ茶白の下臼で、中央の臼部には溝が引かれる。側面には鑿による工具痕が残る。

石材は、214が安山岩製で、ほかはすべて凝灰岩製である。

砥石　（図版3-25~29）

25は、くさび形をしており四面とも使用されており、平滑である。凝灰質泥岩製。26は、円盤状の薄いもので、側面が尖る。凝灰岩製。27は前者に比べ大形の砂岩製の荒砥である。

28は方形の凝灰質泥岩製の荒砥である。29は、断面が四角形の長細い砥石で、三面が使用され、うち一面には鋭利な段差が残る。石材は、凝灰岩製である。

6 金属製品

笄 (図13-1) 銅製で、平面形が舟形をしており、先の部分が針状に尖る。芯となる幅広の部分には、彫金による細かい鱗状の紋様を施す。

煙管 (図13-2) 銅製の一方が細くなる円筒で、煙管の吸い口部とみられる。

金具 (図13-3) 銅製の扁平な金具で、折れ曲がる。一方が丸くて、中央に小穴をうがつ。ここに釘を打ち込んで使用した飾り金具とみられる。

錢貨 (図14-1~9)

いわゆる宋銭が109枚と寛永通宝が1枚出土している。

II区南側のはば中央に位置する方形のp i t 1には、91枚が一刺しになったものが置かれていた。この遺構からはほかに5枚みつかっており、もともと96枚が一刺しになっていたかもしれない。5枚は、1の開通元宝

(武徳4年=621年に初めて鋳られた)・2の景德元宝(景德元年=1004年初鋳)・3の祥符元宝(大中祥符元年=1008年初鋳)・皇宋通宝(宝元2年=1039年初鋳)・4の元符通宝(隸書・元符元年=1098年初鋳)である。91枚が一刺しになったもののうち、取り上げ時に剥離したものをみると、淳化元宝(淳化元年=990年初鋳)・天聖元宝(天聖元年=1023年初鋳)・皇宋通宝がある。

II区南側半分の北側SD 8寄りから、10枚がまとまって見つかっている。開通元宝・天聖元宝・5と6の皇宋通宝(行書1枚・隸書2枚)・7の元豐通宝(元豐元年=1078年初鋳・行書1枚・草書1枚)・紹聖元宝(2枚・紹聖元年=1094年初鋳)・8の永樂通宝(永樂9年=1411年初鋳)である。

このほか、IV区のSX 1とSK 1から9の元豐通宝が各1枚、IV区のSD 1から熙寧元宝(熙寧元年=1068年初鋳)が1枚見つかっている。

また、IV区SD 1の南側確認面から寛永通宝(正徳4年=1714年に鋳られたもの)が1枚出土している。

鏡 (図14-10) II区のp i t 11から、209の常滑大壺とともに検出した銅鏡の破片がある。直径11cm(復原)・縁帶の高さは1cmである。

7 瓦類 (図版3-31~33・35)

31~33はすべてII区側のI区と接する南端から出土している。31は軒丸瓦で外縁が残存す

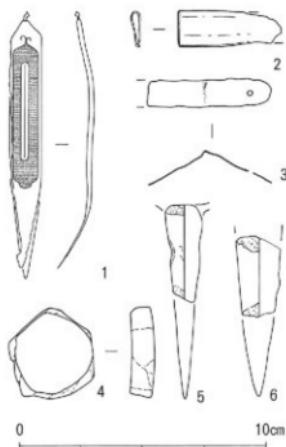


図13 金属製品等実測図

るのみで、全形は不明である。外区に直径5.5mmの珠紋を30個（復原して数えたもの）配置する。中心にはおそらく三つ巴紋を配するものとみられる。東山61号窯（12世紀前半）出土の三巴紋軒丸瓦に、瓦当面径及び珠紋の数が類似するものである。

32・33は丸瓦で、32の凹面には布目痕が認められる。すべて焼成が軟質である。

35はI区SD3の溝内から出土したもので、16弁の菊花紋を配する。近世期以降のものであろう。

8 加工円盤 (図13-4)

1点のみの出土である。常滑窯の赤焼きの製品を使用し、円形に打ち欠いただけのものである。

9 壁土

発掘調査区域のほぼ全面にわたって、火熱を受けて赤色化したすさ混じりの粘土塊が見つかっている。この塊には、壁下地の小舞竹の跡が残る。これは、壁土であったとみられる。残存塊としては、拳ほどのものが最も大きくて、特に、I区のSX1において、節をもつ直径1cmほどの植物（萱とみられる）の炭化物とともにまとまって出土した。

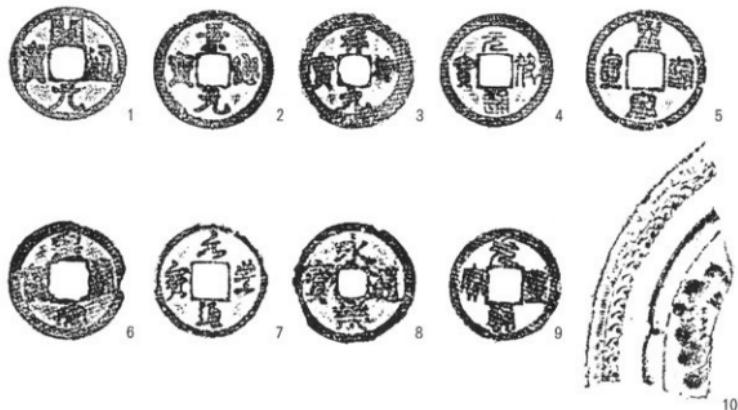


図14 銭貨・鏡拓影図 (原寸)

第4章 調査のまとめ

弥勒寺遺跡の寺院造営と廃絶 『横須賀町誌』によれば、弥勒寺（真言宗）について次のように記す。

嵯峨天皇の弘化五年（紀元一四七五）宗祖弘法大師當郡御巡化の通り有縁の衆生の為、一字を建立されたのが此の寺の起因である、大師の法曾孫理源大師が住山せられてから七堂伽藍完備し、當時本郡屈指の一大寺であった、山門の仁王は鎌倉時代の作で當時隆盛の名残である、後世織田信長の兵火に罹り頽廢したが、天文十一年（紀元二二〇二）顯昌上人大に努力復興された、爾來傳へて十六世現實龍師に及んで居る、徳川光友公觀福寺に次いで帰依深かつた。

現住十八世木村達章師によれば、寺伝として、山門北方に位置する台地上に寺坊があったとのことである。この位置は調査区域のⅡ区平坦面にあたる。山門との距離は約70mで、北高は12mほどである（図版1）。

このⅡ区も含む発掘調査の所見からみて、何らかの寺坊が建っていた可能性はある。すなはち、建物の壁下地の小舞竹の跡が残る壁土塊やわずかではあるが屋根瓦（図版3-31~33）があることからみて、何らかの建物があった。この建物は、刺しの状態の銭貨を埋納する特別な方形穴（Ⅱ区p i t 1）及び山上における五輪塔の存在などからみて、寺院の様相が濃いことからである。その始まりは不明であるが、最も充実していた時期としては、遺物として量も多くまとまりをもつ瀬戸美濃窯産陶器が、大窯I a期（1490年代から1510年頃まで）・大窯I b期（1510年頃から1530年頃まで）・大窯II a期（1530年頃から1550年頃まで）であり、16世紀の前半であったとみられる。そして、これら陶磁器類が、土坑・溝等の遺構に廃棄されていることと、それ以後の時代の日常容器類をはじめとする遺物がほとんど認められないことから、16世紀の後半にはこの地点では廃絶してしまったことを示している。廃絶した理由としては、土坑・溝等の遺構に廃棄された陶磁器類とともに、炭化物や焼土塊となった壁土があることから、火災にあったためとみられる。この火災の原因が、「織田信長の兵火」にあったかどうかについては、発掘調査の成果からは特定できない。

*石川松衛 1928『横須賀町誌』愛知県史蹟編纂会・知多郡横須賀町役場発行

西紀815年 *西紀1542年

****顯昌上人は、弥勒寺の記録によれば、中興開山で第一世にあたる。生没年は不詳。第六世の政久が、貞享2年（1685年）に没しており、それ以前であることは確かである。

*****現在の弥勒寺は、尾張第二代藩主であった徳川光友によって寄進されたものである。觀福寺は、弥勒寺の約1.2km南方の丘陵上にある天台宗の古刹。

***** Ⅱ区平坦面のなかほどにあって、何らかの建物の心穂的な意味合いをもつ遺構ではないかと考える。
***** 出土遺物からみて、一応、13世紀の前半までは遡ることができる。

16世紀の知多半島 戦国時代における知多半島のようすを、福岡猛志氏の著された『知多の歴史』や『東海市史』によって、紐解いてみよう。

知多半島は、尾張と三河の境に突き出ており、東岸が三河湾に西岸が伊勢湾に面している。当時、尾張には織田氏が三河には松平氏（後の徳川氏の祖）が、さらにその背後に今川氏がいた。半島域にも諸将があり、群雄割拠の状態であった。半島の付け根にあたる北部には、荒尾氏（東海市域）、花井氏（東海市域～知多市域）、水野氏（東浦町域以南）、佐治氏（常滑市域以南）が、半島先端の南部には、三河国渥美の田原城主戸田氏が、三河湾を介して勢力を伸ばしていた。やがて、水野氏が知多の東北部をおさえ、三河の刈谷方面へも進出した。こうして、織田の勢力と直接境を接するようになった水野忠政は、松平と結ぶべく、於上、於大のふたりの娘を松平氏に嫁がせた。この於大と松平広忠との間に生まれたのが、後の徳川家康である。その後、天文12年（1543年）に、忠政が亡くなると、その子信元は、織田信秀と同盟を結んだ。やがて、水野氏は半島全域を勢力下に置くようになった。天文20年（1551年）、織田信秀が亡くなり、信長が跡を継いで争いが続くなかで、西三河をほぼ支配下に置いた今川義元が知多への進出を始めた。天文22年には、水野氏の砦がある村木（大府市）を襲い、村木砦を築いた。織田信長は、水野信元の求めに応じて、翌年この砦を攻めて落城させた。そして、今川方に与していたとみられる花井氏の寺本城下も攻めた。この折、本市域の野夫（藪）城下も焼き討ちにあったようである。こうした争いのなかにあって、半島内に入り込む入口となる地域のひとつであった弥勒寺周辺は、戦火を被ることが多かったところである。守本は、弥勒寺周辺と同じ伊勢湾岸にあり、離れてはいるものの見渡すことのできるところである。今川勢は、その後も知多に乱入して混亂が続いた。その終わりをみたのは、永禄3年（1560年）の桶狭間の合戦を経て、永禄5年に織田信長と松平元康（徳川家康）が和睦を結んでからである。その後、天正10年（1582年）に、本能寺の変によって信長が亡くなると、知多を含む尾張は、信長の二男信雄が領することになった。織田信雄は、天正18年（1590年）に秀吉によって追放され、次いで、秀吉の甥の羽柴秀次が、尾張を領した。やがて、慶長5年（1600年）の関ヶ原の合戦に先立って、志摩国鳥羽城主の九鬼義隆が知多を攻め、弥勒寺周辺地域も戦火にあった。

弥勒寺近辺の寺院のようすを、前述した『横須賀町誌』によってみると、次のようである。

観福寺「同寺の旧記によると古寺領百五十貫（一に十五町ともいふ）あつたけれども織田信長の時之を没収せられ豊臣秀吉に至って又朱印を賜ったが、慶長中九鬼氏の暴火に焼亡し後絶へた」という。

龍雲院（弥勒寺の南方眼下にある寺）「天文年中火災に罹って全部鳥有に帰し云々」。

安楽寺・玉泉院・妙乗院（寺本に近い東海市養父町にある）「元亀天正の頃織田信長の兵火に罹り堂塔伽藍悉く鳥有に帰し云々」。

というようにあり、近隣の多くの寺院も戦火、火災によって廃絶したことが伺える。

* 福岡猛志 1991『知多の歴史』松緑社

** 東海市史編さん委員会編 1990『東海市史』東海市

表2 出土遺物計測表

*計測数値の単位はcm、**「？」付記数値は復原

図番号	器種	器高	口径	底径	出土場所	備考
1	条痕紋土器	-	-	-	III-p i t 1	壺形土器
2	条痕紋土器	-	-	-	III-p i t 1	壺形土器
3	条痕紋土器	-	-	-	III-p i t 1	壺形土器
4	条痕紋土器	-	-	-	III-p i t 1	壺形土器
5	条痕紋土器	-	-	-	III-p i t 1	壺形土器
6	条痕紋土器	-	-	-	III-p i t 1	壺形土器
7	条痕紋土器	-	-	6.8?	III-p i t 1	壺形土器
8	条痕紋土器	-	-	6.2?	III-p i t 1	壺形土器
9	条痕紋土器	-	-	5.6?	III-p i t 1	壺形土器
10	条痕紋土器	-	-	7.0--	III-p i t 1	壺形土器
11	条痕紋土器	-	-	10.0?	III-p i t 1	壺形土器
12	台付壺	-	-	-	IV-A 点	赤茶色・土師器
13	环蓋	4.4-	12.5?	-	IV-S X 2	青灰色・須恵器
14	环蓋	5.1-	14.6?	-	IV-S X 1	青灰色・須恵器
15	环蓋	4.4?	14.8?	-	IV-S X 1	青灰色・須恵器
16	环蓋	-	13.8?	-	IV-S X 1	青灰色・須恵器
17	环蓋	-	14.6?	-	IV-S X 1	灰白色・須恵器
18	环身	4.9?	12.6?	-	IV-S X 1	受部最大径15.4?・青灰色・須恵
19	高坏	10.1-	9.9-	9.0-	IV-S X 1	青灰色・須恵器
20	はそう	-	12.6?	-	II-南端	灰色・須恵器
21	はそう	--	-	-	IV-S X 2	青灰色・鶴巣径15・暗オーリーブ褐色粘
22	鉢	-	-	8.6-	IV-S X 2	灰色・須恵器
23	石棒?	長径4	短径2.4	-	IV-S X 2	緑色片岩
24	たたき石	長径8.8	短径6.9	厚み4.1	IV-S X 2	安山岩・両面がくぼむ
25	砥石?	幅5.3	厚み1.4	残存長6.9	II-南	凝灰質泥岩・4面とも使用
26	砥石?	幅5.3	厚み0.7	残存長7.8	IV-S X 2	凝灰岩・p i t 3 出土
27	砥石	-	-	-	IV-S X 1	砂岩
28	砥石	--	-	厚み3.3	IV-S X 1	凝灰質砂岩
29	砥石	長さ9.4	最大幅2.1	-	II-南	凝灰岩
30	瓦質土器	-	-	-	IV-S X 2	黒色・器形不明
31	軒丸瓦	瓦当径15.5	-	-	II-南	灰白色
32	丸瓦	-	-	-	II-南	布目裏
33	丸瓦	-	-	-	II-南	黒色
34	丸瓦	厚み1.9	-	-	IV-南端	布目痕・縄目叩き・ヘラ削り
35	軒丸瓦	瓦当径9.2	-	-	I-S D 3	黒色・菊花紋
36	小皿	2.2-	8.4?	4.8?	IV-中央	糸切り底
37	小皿	1.7-	8.2-	5.4-	IV-S X 2	糸切り底
38	小皿	1.7-	7.8-	5.4-	IV-S X 2	無釉
39	土師皿	1.5-	7.1-	4.1-	IV-S X 1	ロクロ開窓・糸切り底
40	碗	-	-	-	II-S D 8	無釉
41	茶碗	3.3-	11.6?	5.8?	IV-S X 2	白色・無釉
42	折縁皿	--	-	台径7.6?	IV-S X 2	糸切り底・灰釉・底部露胎
43	おろし皿	-	14.0?	-	II-南	灰釉縁掛け
44	おろし皿	-	-	6.0-	III-S D 1	糸切り底・黄灰色
45	壺	-	14.6?	-	II-S D 8	灰釉
46	壺	-	13.4-	-	II-南	三ないし四耳壺・サビ釉
47	壺	-	15.0?	-	II-S D 8	鉄釉
48	壺	-	-	10.2-	IV-S X 2	焼成後穿孔
49	鉢	-	-	台径14.0-	IV-S X 1	内外面ともサビ釉・底部露胎
50	燭台	-	-	-	IV-S X 1	外面サビ釉・上端が接合面
51	台付碗	-	-	台径5.0	II-S D 8	糸切り底
52	天日茶碗	-	10.4?	-	IV-S X 2	鉄釉
53	天日茶碗	5.9-	11.7?	台径5.0?	II-S D 8	鉄釉
54	天日茶碗	-	-	台径4.2	I-S D 3	鉄釉・高台周辺サビ釉
55	天日茶碗	-	-	台径4.2	I-S D 3	
56	天日茶碗	5.5-	12.2?	台径4.6?	II-S D 8	鉄釉・高台周辺サビ釉

國番号	器種	器高	口径	底径	出土場所	備考
57	大口茶碗	6.2-	11.4-	台径4.6	IV-SX 2	鉄輪
58	天目茶碗	5.7-	11.0?	台径4.2	II-SK 5	鉄輪
59	天目茶碗	-	-	台径3.8	IV-SX 1	高台周辺サビ軸の鉄化粧
60	天目茶碗	6.1-	11.4?	台径4.2	IV-SX 2	鉄輪
61	天目茶碗	-	12.0-	-	IV-SX 2	鉄輪
62	天目茶碗	-	12.0-	-	IV-SX 2	鉄輪・中央の黒色土層
63	天目茶碗	-	11.6?	-	IV-SX 2	鉄輪
64	天目茶碗	-	-	台径3.8	IV-SX 1	鉄輪
65	天目茶碗	-	12.0?	-	II-SD 8	鉄輪
66	台付碗	6.2-	12.0-	台径6.0	II-南	鉄輪・糸切り底
67	台付碗	-	13.6?	-	II-南	サビ軸
68	台付碗	-	-	4.9-	IV-SK 8	糸切り底・内外面ともサビ軸
69	丸皿	2.6-	9.4?	5.0?	IV-SX 2	灰軸・印花紋
70	丸皿	-	-	台径8.4?	II-南	印花・灰軸
71	丸皿	1.9-	8.8-	台径4.6	IV-SX 1	底部内面に印花紋・灰軸
72	大形鉢	-	-	胴径15.8	IV-SK 8	鉄輪
73	半碗	-	-	台径4.8	IV-SX 2	鉄輪
74	丸皿	2.7--	12.8?	4.4?	II-SD 8	鉄輪縁掛け
75	筒?	-	胴径15.5	11.6-	IV-SX 2	鉄輪・内側に横ピン
76	茶入	-	7.4?	-	II-南	鉄輪
77	大形容器	胴径22.2?	-	-	III-中央	内外面ともサビ軸・円形浮紋貼付
78	折縁鉢	-	27?	-	IV-SX 2	灰軸
79	すり鉢	-	30.0?	-	IV-SK 8	内外面ともサビ軸
80	すり鉢	-	-	11.4?	IV-SK 8	内外面ともサビ軸
81	すり鉢	-	28.0?	-	I-SX 1	内外面ともサビ軸
82	すり鉢	-	30.0?	-	III-SD 1	内外面ともサビ軸
83	すり鉢	-	26.0?	-	II-南	内外面サビ軸
84	すり鉢	-	29.0?	-	IV-SX 2	内外面サビ軸
85	すり鉢	-	30.0?	-	IV-SX 2	内外面サビ軸
87	すり鉢	-	-	-	IV-SX 1	サビ軸内外面施釉
88	すり鉢	-	28.4?	-	II-SD 8	内外面サビ軸
89	すり鉢	--	30.6?	-	II-SD 8	内外面サビ軸
90	土師皿	2.2-	12.6-	6.0-	I-SX 1	ロクロ調整・糸切り底
91	土師皿	1.7-	11.2?	6.8?	II-南	ロクロ調整・糸切り底
92	土師皿	2.3-	14.2-	7.5-	II-南	ロクロ調整・糸切り底
93	土師皿	1.8-	11.6?	6.2?	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
94	土師皿	1.5?	13.4?	7.2?	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
95	土師皿	2.2-	11.3?	4.8?	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
96	土師皿	2.3-	12.0-	6.6-	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
97	土師皿	2.2-	13.2--	7.0-	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
98	土師皿	2.0-	11.8?	6.0?	II-南	ロクロ調整・糸切り底
99	土師皿	2.1?	12.0?	-	III-SD 1	ロクロ調整
100	土師皿	2.4-	12.0?	6.0?	IV-南	ロクロ調整・糸切り底
101	土師皿	1.8-	10.3?	6?	IV-Ⅲ境	ロクロ調整・糸切り底
102	土師皿	2.2-	13.6?	8.8?	IV-Ⅲ境	ロクロ調整・糸切り底
103	土師皿	2.3-	13.1?	6.6?	IV-Ⅲ境	ロクロ調整・糸切り底
104	土師皿	2.4-	12.3?	6.2?	IV-SX 2	ロクロ調整・糸切り底
105	土師皿	2.2-	12.6?	6.0?	IV-SX 2	ロクロ調整・糸切り底
106	土師皿	1.2-	7.8?	4.6?	II-南	ロクロ調整・糸切り底
107	土師皿	1.7?	12.9?	7.4?	II-南	ロクロ調整・糸切り底
108	土師皿	2.2-	13.2-	7.2-	II-南pit14	ロクロ調整・糸切り底
109	土師皿	1.9-	11.9?	-	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
110	土師皿	2.2-	11.8?	7.6?	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
111	土師皿	1.6-	12.1?	7.4?	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
112	土師皿	1.9-	11.9?	7.0?	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
113	土師皿	1.9-	7.8-	3.6-	II-北	ロクロ調整・糸切り底
114	土師皿	2.4-	12.4?	6.6?	IV-SX 1	ロクロ調整・糸切り底
115	土師皿	2.3-	11.2?	5.4?	IV-SX 2	ロクロ調整・糸切り底
116	土師皿	2.3-	11.6?	6.4?	IV-SX 2	ロクロ調整・糸切り底

図番号	器種	器高	II 極	底 極	出土場所	備 考
117	土師皿	2.2-	10.4-	5.2-	IV-SX 2	ロクロ調整・糸切り底
118	土師皿	2.1-	11.9?	5.7?	IV-SX 2	ロクロ調整・糸切り底
119	土師皿	2.2-	-	-	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底・焼成後穿孔
120	土師皿	-	-	4.5-	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
121	土師皿	2.5?	13.4?	7.0?	II-SD 8	ロクロ調整・糸切り底
122	土師皿	0.7-	5.6-	-	I-SX 1	非ロクロ調整手づくね
123	土師皿	1.1-	5.5-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
124	土師皿	1.0-	5.9-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
125	土師皿	1.2-	5.7-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
126	土師皿	1.3-	5.9-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
127	土師皿	1.5-	6.4?	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
128	土師皿	1.5-	6.0-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
129	土師皿	1.4-	6.0-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
130	土師皿	1.2-	5.4-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
131	土師皿	1.4-	6.4-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
132	土師皿	1.3-	6.3-	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
133	土師皿	1.4?	6.4?	-	III-SD 1	非ロクロ調整手づくね
134	土師皿	1.6-	6.6-	-	III-SD 1	非ロクロ調整手づくね
135	土師皿	1.3-	6.0-	-	IV-SX 1	非ロクロ調整手づくね
136	土師皿	1.4-	5.7-	-	IV-SK 8	非ロクロ調整手づくね
137	土師皿	1.2-	6.0-	-	IV-SX 2	非ロクロ調整手づくね
138	土師皿	1.2-	7.1-	-	II-S 南	非ロクロ調整手づくね
139	土師皿	1.3-	7.6?	-	II-SD 8	非ロクロ調整手づくね
140	土師皿	1.4?	7.2?	-	III-pit 2	非ロクロ調整手づくね
141	土師皿	1.4-	7.2-	-	III-SD 1	非ロクロ調整手づくね
142	土師皿	1.4-	6.8-	-	IV-SX 1	非ロクロ調整手づくね
143	土師皿	1.3-	7.8?	-	IV-SX 1	非ロクロ調整手づくね
144	土師皿	1.7?	7.8?	-	IV-SX 1	非ロクロ調整手づくね
145	土師皿	1.3-	7.2-	-	IV-SX 2	非ロクロ調整手づくね
146	土師皿	2.1-	9.4-	-	IV-SX 2	非ロクロ調整手づくね
147	土師皿	1.4-	8.2-	-	IV-SX 2	非ロクロ調整手づくね
148	土師皿	2.0-	8.8-	-	IV-SX 2	非ロクロ調整手づくね
149	内耳鍋	-	21.4?	-	II-SD 8	
150	内耳鍋	-	22.4?	-	II-SD 8	
151	内耳鍋	14.4?	16.0?	14.4?	II-SD 8	
152	内耳鍋	-	30.0?	-	II-SD 8	
153	内耳鍋	13.5?	25.0-	-	II-S 南pit 14	
154	内耳鍋	-	29.0-	-	IV-SX 2	
155	内耳鍋	14?	26.0?	-	IV-SX 2	
156	内耳鍋	12.0-	24.0?	-	IV-SX 2	
157	内耳鍋	17.0?	30.0?	-	IV-SX 2	
158	内耳鍋	16.5?	28.0?	-	IV-SX 2	
159	内耳鍋	16.8?	26.0?	-	IV-SX 2	
160	内耳鍋	-	28.0-	-	IV-SX 2	
161	内耳鍋	16.1?	30.0-	-	IV-SX 2	
162	内耳鍋	-	27.5?	-	IV-SX 2	
163	内耳鍋	16.7?	29.0-	-	IV-SX 2	
164	内耳鍋	-	27.2-	-	IV-SX 2	
165	内耳鍋	-	32.0?	-	IV-SX 2	
166	内耳鍋	-	30.0?	-	IV-SX 2	
167	内耳鍋	-	32.0?	-	IV-SX 2	
168	内耳鍋	-	30.0-	-	IV-SX 2	
169	内耳鍋	-	31.2-	-	IV-SX 2	
170	内耳鍋	-	31.0-	-	IV-SX 2	
171	内耳鍋	-	30.0-	-	IV-SX 2	
172	内耳鍋	-	33.6?	-	IV-SX 2	
173	内耳鍋	-	36.0?	-	IV-SX 2	
174	釜	-	14.0?	-	IV-SX 2	明褐色
175	内耳鍋	15.8-	30.0?	-	IV-SX 2	一足

図番号	器種	器 高	口 径	底 径	出土場所	備 考
176	内耳鍋	15.3-	30.0-	-	IV-S X 2	三足
177	内耳鍋	-	33.6-	-	IV-S X 2	二足
178	羽付鍋	-	42.2?	羽径47.0?	I-S X 1	
179	羽付鍋	-	39.0-	羽径42.6?	I-S X 5	
180	羽付鍋	-	44.0?	羽径46.4?	I-S D 2	
181	羽付鍋	-	42.0?	羽径44.6?	II-南	
182	羽付鍋	-	39.8-	羽径43.6-	II-S D 8	
183	羽付鍋	-	41.5?	羽径44.6?	II-S D 8	
184	羽付鍋	-	39.4-	羽径42.0	II-S D 8	
185	羽付鍋	24?	44.4-	羽径46.8-	II-S D 8	底部開口・外側スヌ付着
186	羽付鍋	-	40.0-	羽径43.0-	IV-S X 2	
187	羽付鍋	-	42.2?	羽径45.8?	IV-S X 2	
188	羽付鍋	-	38.0-	羽径41.0	IV-S X 2	
189	羽付鍋	-	40.0?	羽径42.8?	IV-S X 2	
190	羽付鍋	-	42.0-	羽径46.5	IV-S X 2	
191	羽付鍋	27?	38.0-	羽径42.8	IV-S X 2	
192	羽付鍋	-	-	羽径40.8?	IV-S X 1	淡灰褐色
193	鉢	-	-	-	II-S D 8	無釉
194	鉢	-	32.0?	-	IV-S X 1	常滑焼?・暗赤褐色
195	甕	-	-	-	IV-S X 2	赤褐色
196	甕	-	-	-	IV-S X 1	自然釉が掛かる
197	甕	-	-	-	II-南	
198	大甕	-	-	-	II-中央	押印紋
199	甕	-	-	-	IV-S X 2	赤褐色
200	甕	-	13.8?	-	II-南	褐色
201	甕	-	-	-	II-南	
202	大甕	-	-	-	IV-S X 1	
203	甕	-	-	-	II-南	
204	鏡	8.6-	13.0?	11.6?	IV-S X 1	黒褐色
205	鏡	8.0-	15.2?	13.6?	IV-S X 1	黒褐色
206	鉢	-	47.0?	-	III-北	暗赤褐色
207	甕	-	29.8?	-	IV-S X 1	自然釉が掛かる・暗赤褐色
208	甕	-	-	15.0-	IV-S X 2	赤褐色
209	甕	-	-	20.8?	II-南 pit11	赤褐色
210	香炉	-	6.6?	-	II-南	青磁
211	五輪塔	9.0-	-	-	IV-S X 1	笠の部分・花崗岩製
212	挽き臼	8.4-	径19.7	-	IV-p i t 2	凝灰岩
213	挽き臼	10.0-	18.4-	-	IV-S X 2	凝灰岩
214	挽き臼	-	-	-	IV-S K 8	安山岩
215	挽き臼	-	-	-	IV-S X 2	凝灰岩・p i t 4
216	五輪塔	12.6-	上-辺13.8	下-辺24.2	IV-S X 1	上部円錐8?・笠の部分・花崗岩製
図12-1	規	1.9-	長さ15.3	幅5.9	II-S D 8	凝灰質泥岩・天文十五年銘
図12-2	規	-	-	-	II-南	泥岩
図12-3	規	-	-	-	IV-S X 2	泥岩
図12-4	規	-	-	-	IV-S X 1	泥岩
図13-1	笄	長さ11.0-	幅1.3	厚み2.0	IV-S D 8	銅製
図13-2	キセルロ?	残存長4.2	口径1.0?	-	IV-S K 5	銅製
図13-3	銅製品	残存長5.7	幅1.2	厚み0.8	IV-S X 1	五輪塔周辺出土
図13-4	加工内壁	最大3.7	-	-	IV-S K 9	赤色陶器片使用
図13-5	製塙土器	-	-	-	IV-北	知多式4類
図13-6	報塙土器	-	-	-	IV-S D 8	知多式4類

図 版

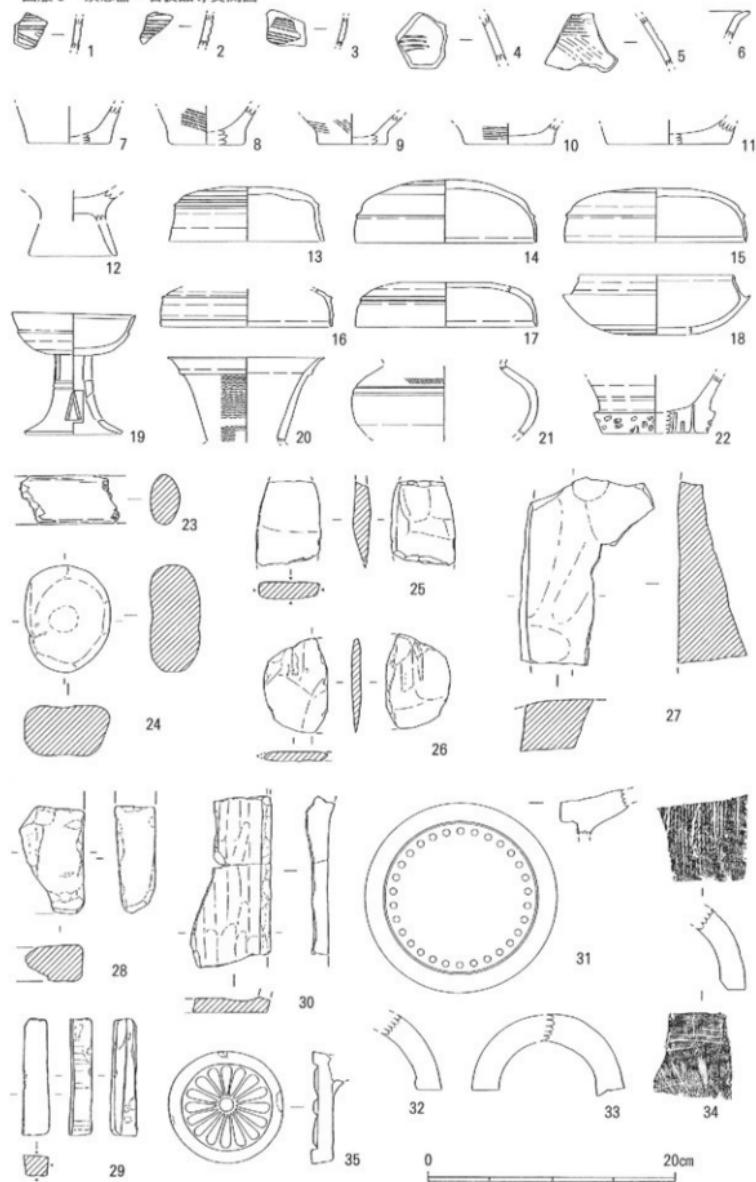
図版1 発掘調査区域図



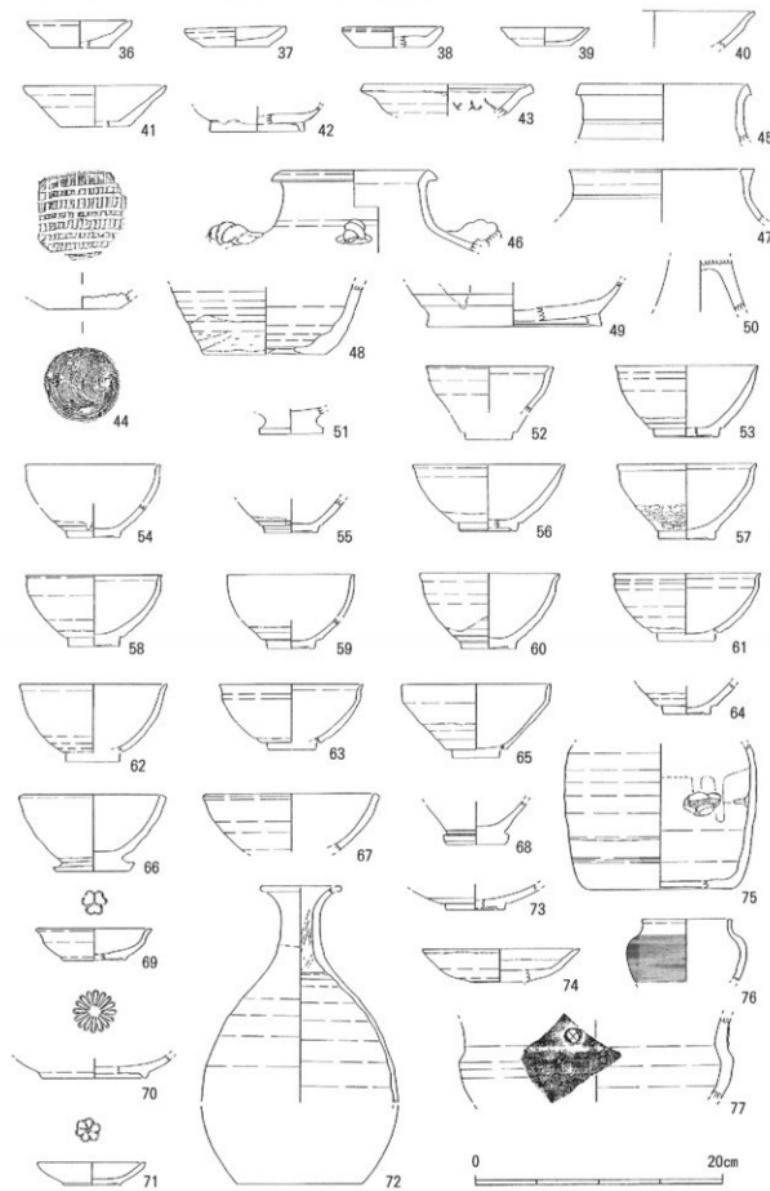
図版2 発掘調査遺構図



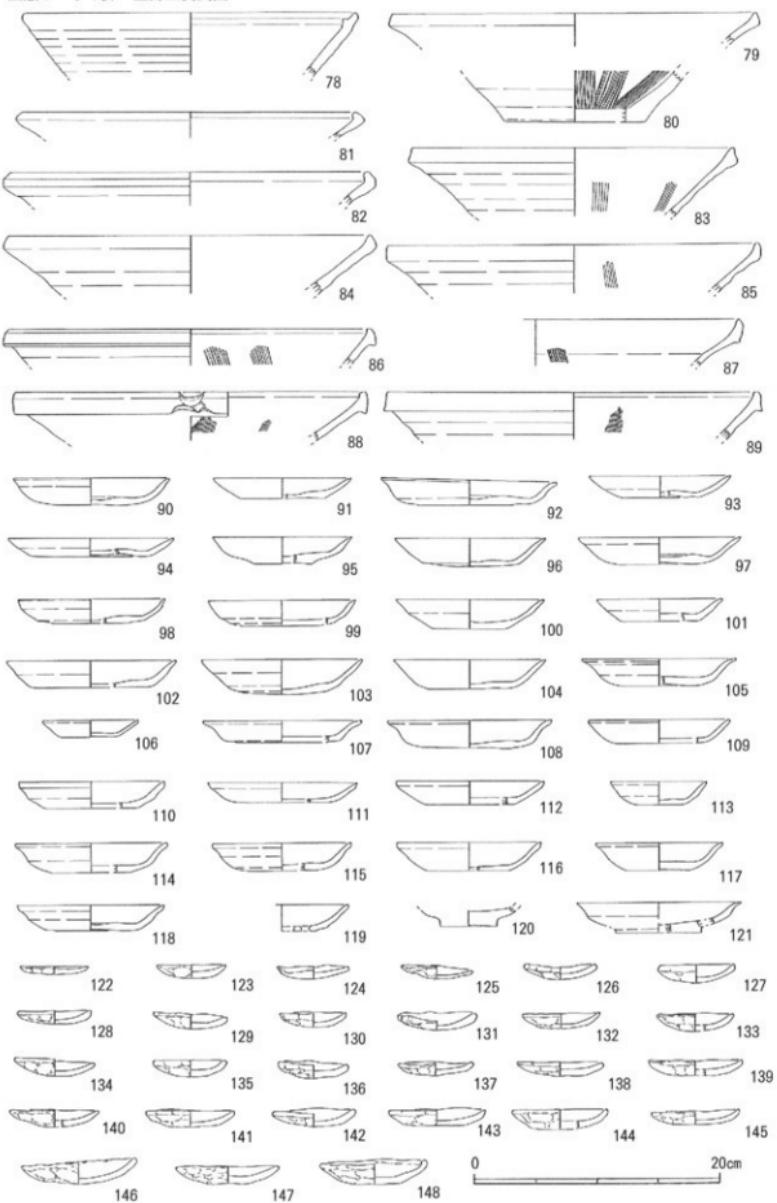
図版3 須恵器・石製品等実測図



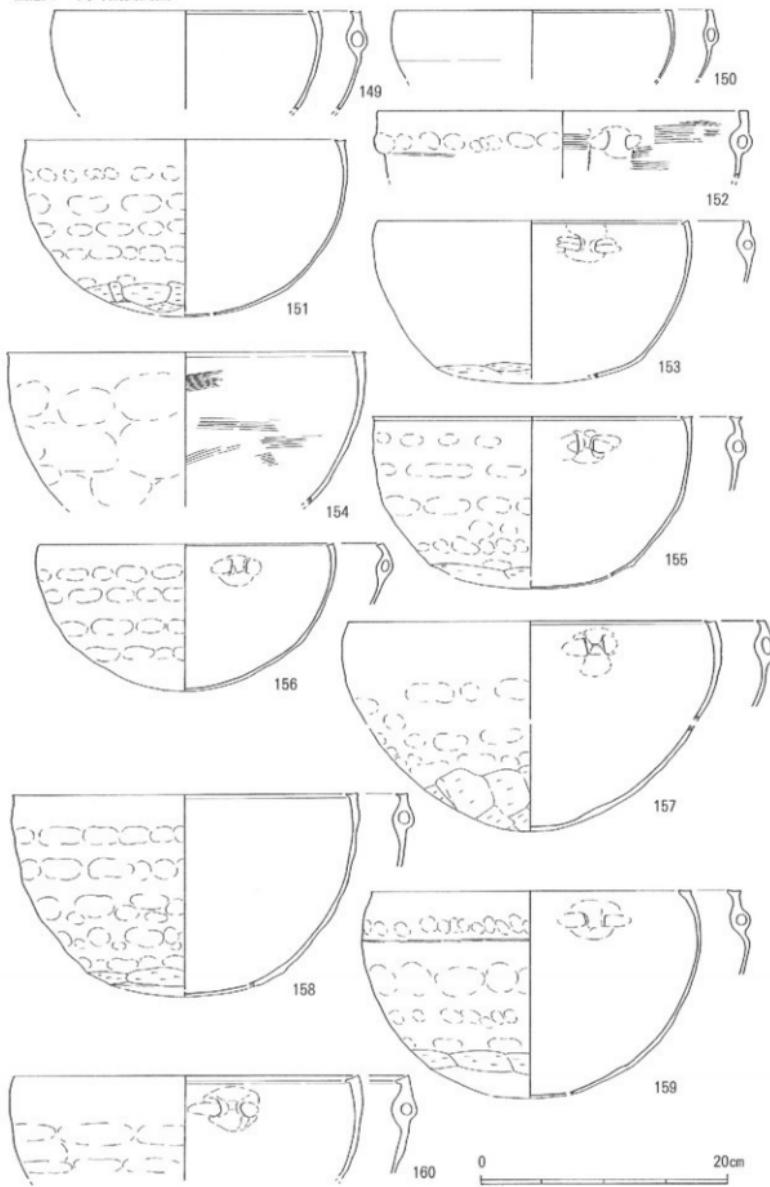
図版4 常滑窯産碗・皿、瀬戸美濃窯産天目茶碗等実測図



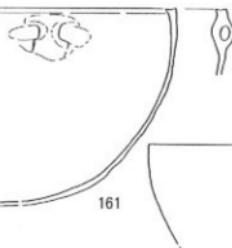
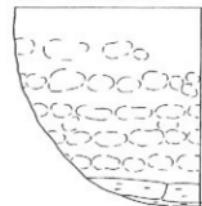
図版5 すり鉢・土師皿実測図



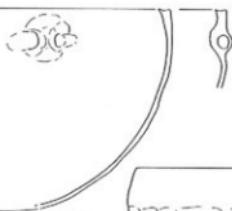
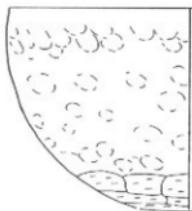
図版6 内耳錫実測図



図版7 内耳鍋実測図

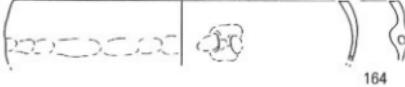


161

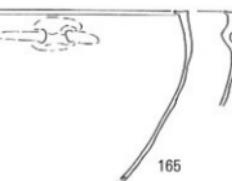
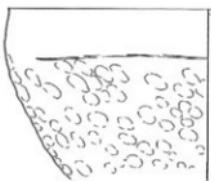


163

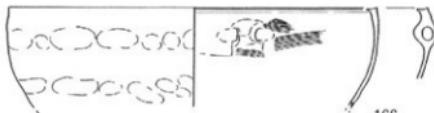
162



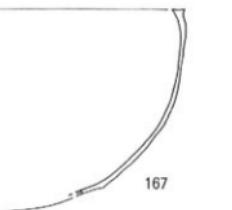
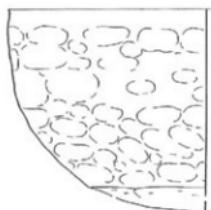
164



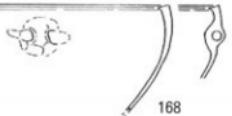
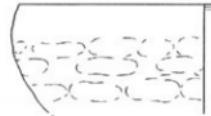
165



166



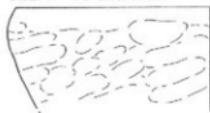
167



168

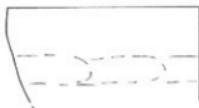
0 20cm

図版 8 内耳鍋実測図

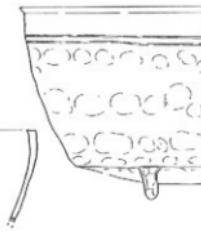


169

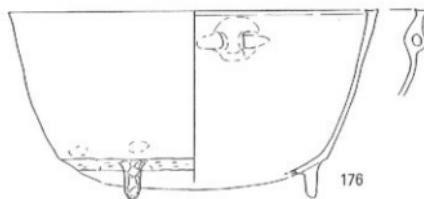
174



170



175



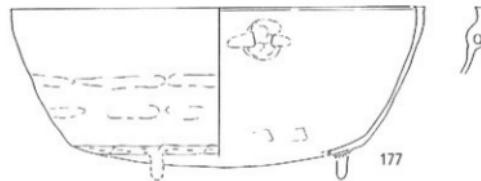
176



171



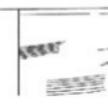
171



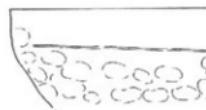
177



172



172



173

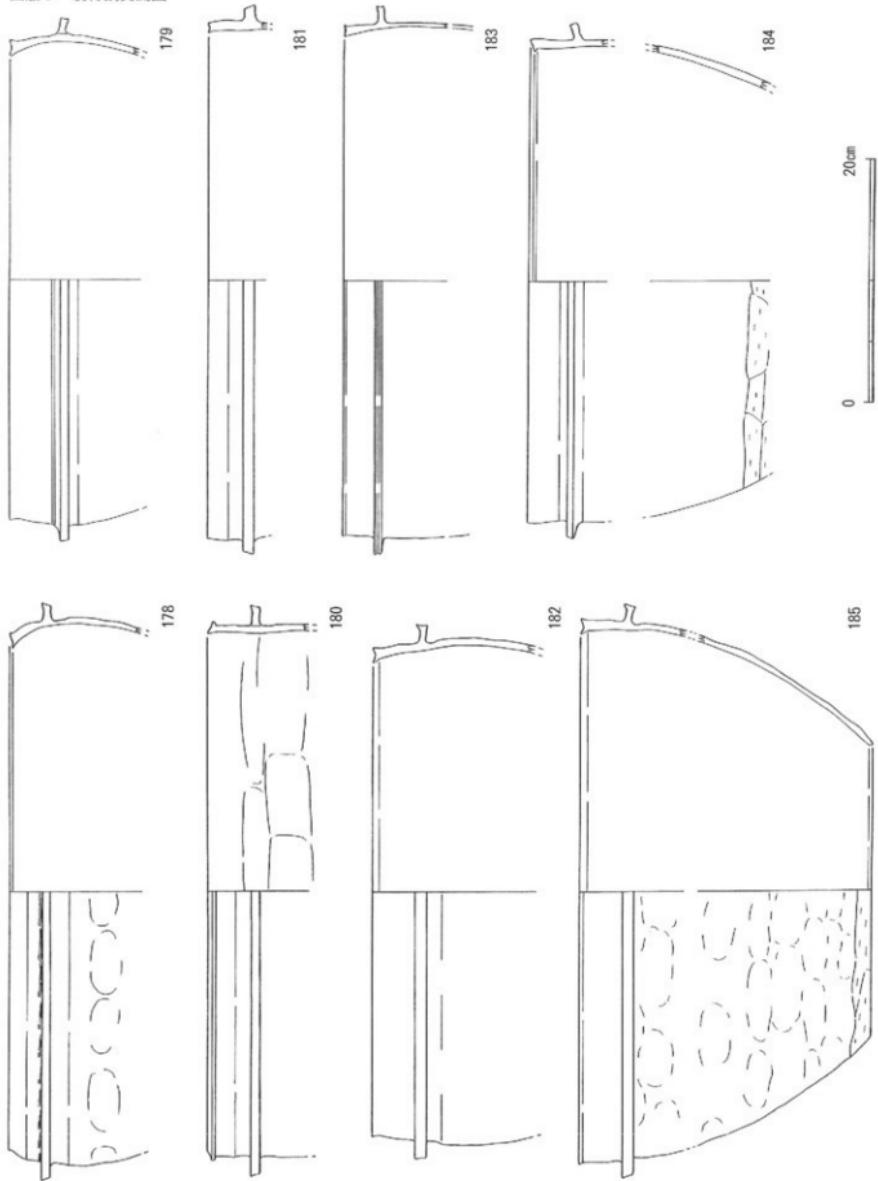


173

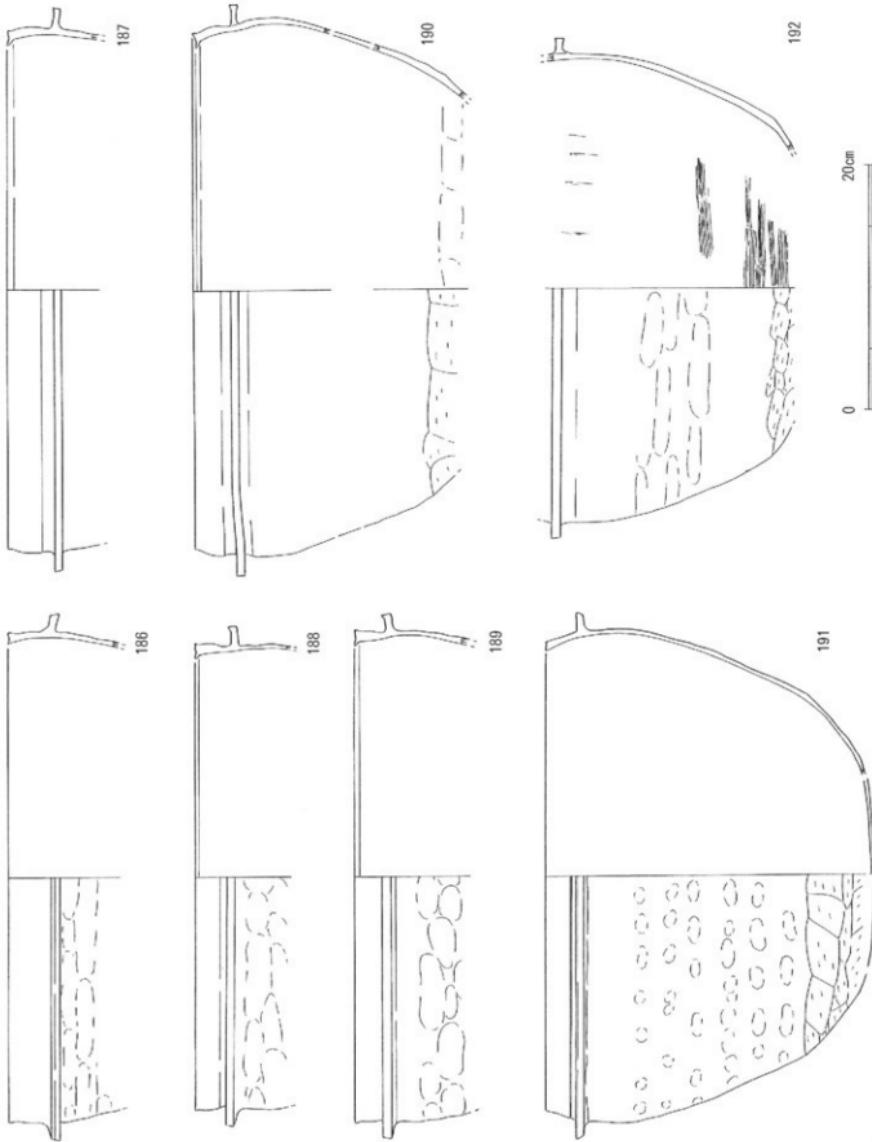


20cm

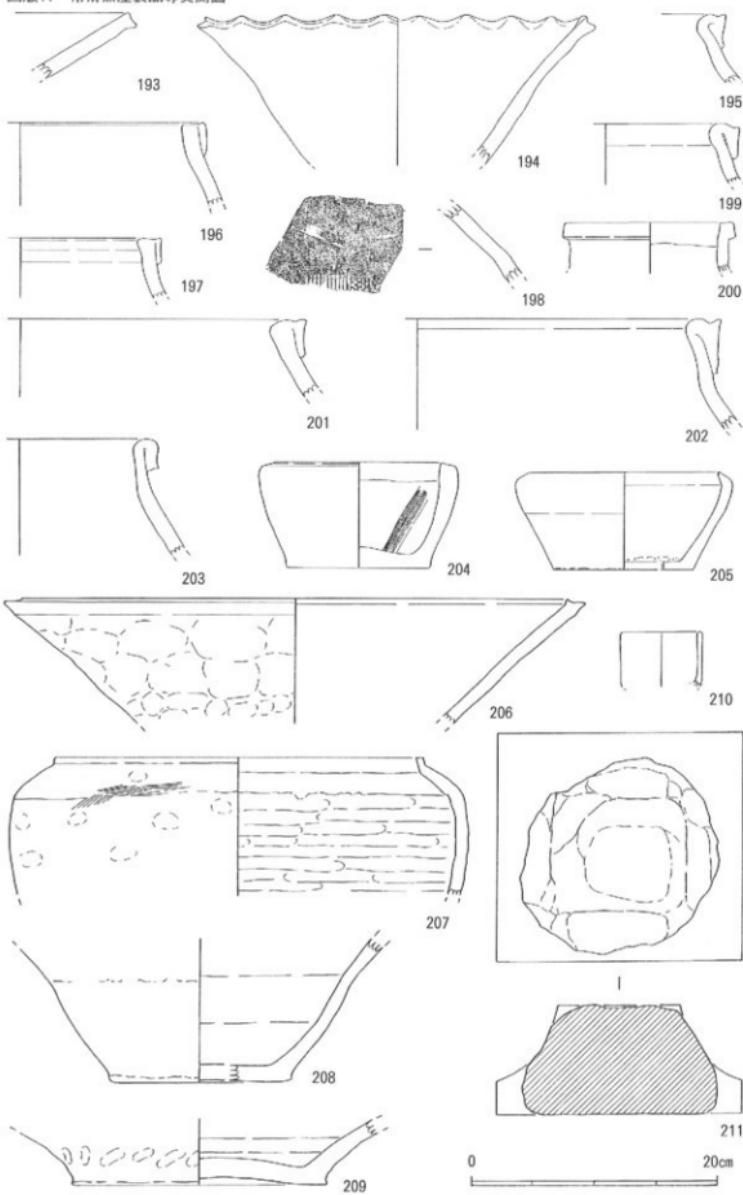
図版9 羽付鍋実測図



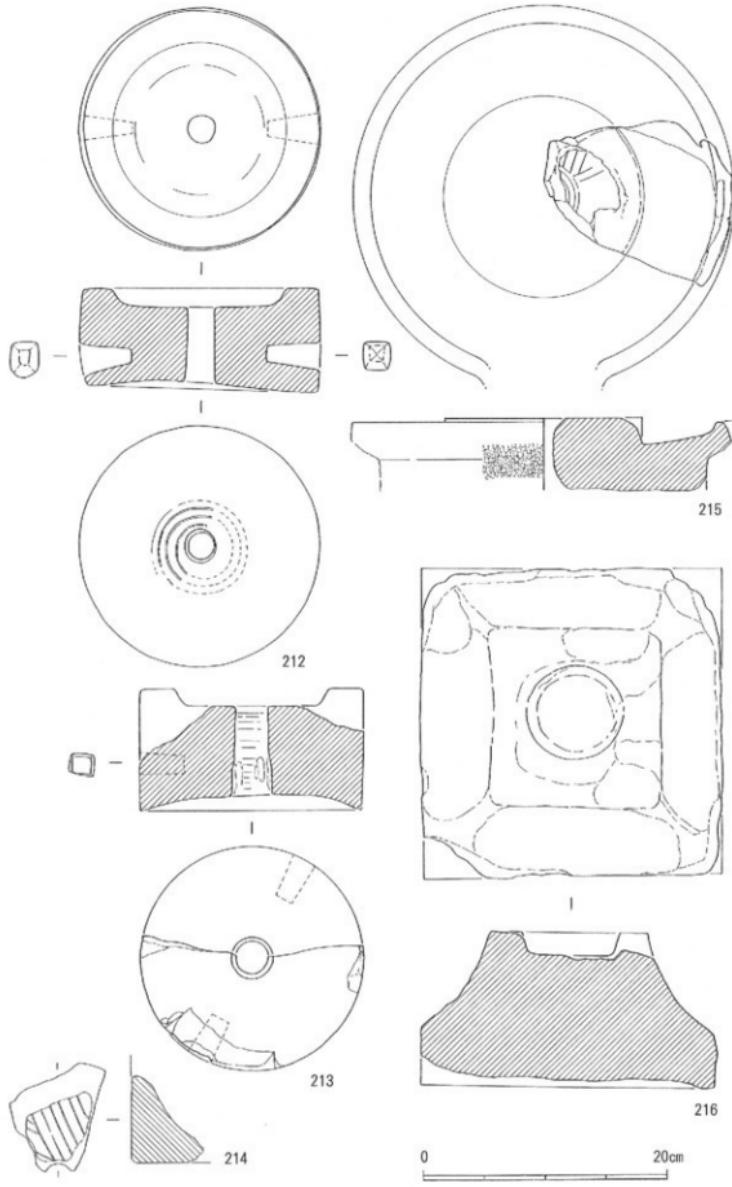
図版10 羽付鍋実測図



図版11 常滑家産製品等実測図



図版12 石製品実測図





弥勒寺遺跡遠景（東から西を望む）



条痕紋土器出土小穴（Ⅲ区Pit 1）



須恵器出土状態（IV区S X 1）



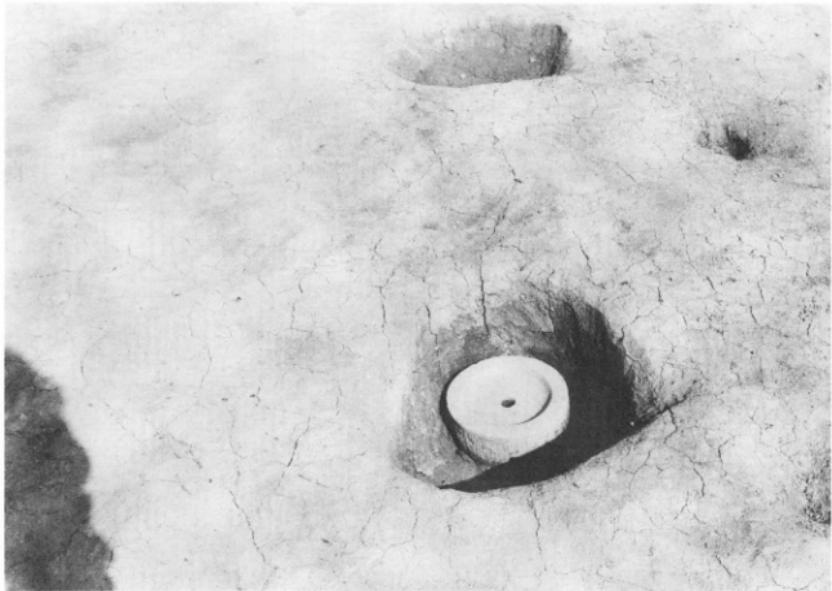
須恵器高坏（IV区S X 1出土・実測図19）



I区とII区遺構 (SD 8・北東から南西を望む)



IV区SX2遺構 (南から北を望む)



IV区換き臼（実測図212）



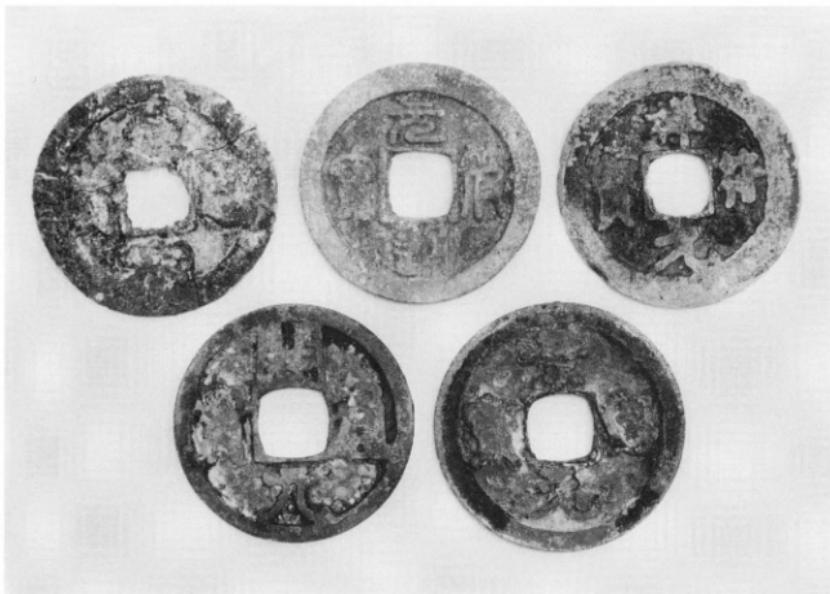
蓋环（実測図13）



土師皿



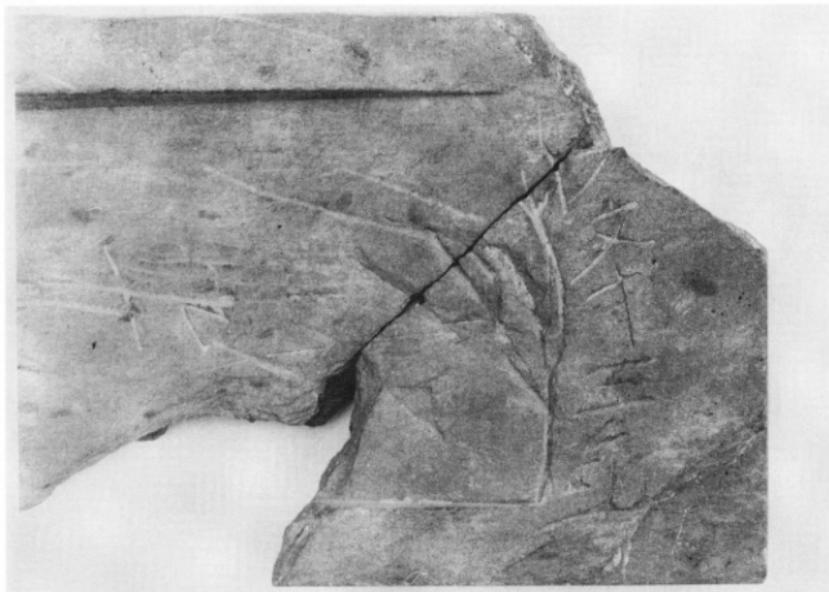
内耳鍋（実測図153）



II区Pit 1内出土銭貨



II区Pit 11出土鏡片



頃記念銘（天文十五年）



小舞竹様の痕跡があるすさ混りの焼土ブロック（壁土）

報告書抄録

ふりがな	あいちけんとうかいしちたみろくじいせきはつくつちょうさほうこく						
書名	愛知県東海市知多弥勒寺遺跡発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	立松 彰						
編集機関	愛知県東海市教育委員会						
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 TEL052-603-2211						
発行年月日	西暦 1998年3月20日						

所 有 者 名	所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
弥勒寺	とうかいし あおたまち 大田町 てらした 寺下	23222	43123	35度 1分 12秒	136度 54分 10秒	961111～ 970212	3,000m ²	マンショ ン建設	
取遺跡名		種別		主な時代		主な遺構		特記事項	
弥勒寺	散布地	弥生		土坑		弥生土器		弥勒寺寺坊関係	
	古墳跡			古墳？		須恵器			
	寺院跡			建物？ 溝		戦国期陶磁器類			

愛知県東海市
知多弥勒寺遺跡発掘調査報告

1998年3月20日

編集・発行 愛知県東海市教育委員会
印 刷 株式会社ディ・エス・ビイ名古屋支社

